

哲学・倫理学の研究者のための
超学際研究の手引き
応用哲学会サマースクール 2019 実施報告

[報告書版]

[編著] 太田和彦 神崎宣次 谷口彩

目次

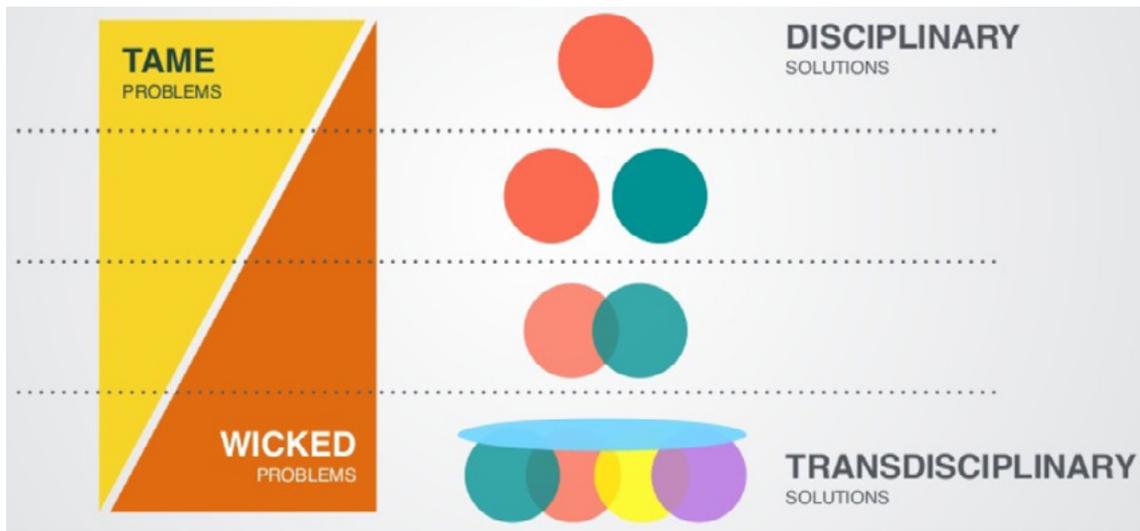
1. はじめに：「転ばぬ先の杖」、あるいは頭から転ばないために	3
2. サマースクールの概要とタイムテーブル	5
a) フライヤー	5
b) タイムテーブル	6
c) サマースクールの様子（写真）	9
d) 全体説明スライド	12
3. インタビュー	19
[インタビュー] 神崎さん・谷口さん (2020.04.25)	19
[インタビュー] 井頭昌彦さん (2020.6.22)	24
[インタビュー] 真貝理香さん (2020.8.5, 9.14)	30
[インタビュー] 鶴田想人さん (2020.7.1)	37
[企画者鼎談] 神崎さん、谷口さん、[太田] (2020.9.9)	41
4. アンケート結果と考察	49
4-1. 知識に関わる事柄	49
4-2. フードスケープに関する事柄	50
4-3. 超学際的交流と「厄介な問題」に関する事柄	51
5. 関係者の所感	53
a) 主催者から [神崎]	53
b) レコーダーから [谷口]	54
6. 超学際的なワークショップのための 12 のヒント	57

1. はじめに：

「転ばぬ先の杖」、あるいは頭から転ばないために

本小冊子は、2019年9月に総合地球環境学研究所（京都）で開催された、応用哲学会サマースクール「フードスケープをつなぐ」（以下、サマースクール）の報告と、このサマースクールを事例とした超学際研究に関する手引きによって構成されています。それぞれサマースクールの開催に、編著者である、太田和彦・神崎宣次は本企画の企画立案者として、谷口彩はグラフィックレコーダーとして、深く関わりました。

本小冊子は、超学際研究 (transdisciplinary research)、ならびに参加型アクションリサーチ (participatory action research) に関心をもつ研究者、特に哲学・倫理学の研究者を、主な読者として想定しています。超学際研究とは、基本的に研究者によって構成される学際研究 (interdisciplinary research) と異なり、職業的な研究者のみならず行政、企業、非営利団体、そして広く市民とともになされる研究実践活動を指す言葉です (Baumgärtner et al., 2008; Frodeman et al., 2017; 他)。超学際研究は、多くの矛盾する知見、価値観が併存する「厄介な問題」(wicked problem: Rittel & Webber, 1973) に対処するための方法の一つとして位置づけられています (Brown et al., 2010 他)。



超学際研究の方法論については、2000年代以降、すでに数多くの優れた事例研究と分析がまとめられ、刊行されています (Pohl et al., 2017 他)。そのなかにはオンラインで、無料で入手できるものもあります。そのため、本小冊子は、超学際研究の方法論への理論的貢献や体系的な紹介を目指すのではなく、あくまで、日本で行われた「持続可能なフードシステムのあり方」をテーマとした超学際的な交流について、そこでなされた意見交換の様子の分析と検討に集中し、いくつかの論点について、参加者へのインタビューや企画者の所見をふまえた詳述を目指しました。

この方針は、本小冊子が編纂された背景——特に文献研究を主とする哲学・倫理学の研究者の場合、日本で超学際研究を始めたいと考えている、あるいは始める必要にせまられているが、じっさいに日本での活動の経験談を聞く機会が、社会学や人類学の研究者と比べて相対的に少ないという事情——とも関連しています。フィールドワークの一環として、地域の方たちと一緒に何かのプロジェクトに携わる機会や、あるいは違う業種の人たちとコラボレーションする経験を積む機会が、私たちにはほとんどありません。具体的な体験がなければ、先述のような超学際研究についての資料を読んでも隔靴搔痒の思いが募るばかりで、具体的にどのように始めればよいかわからない、ということにもなるでしょう。

そのため、本報告書は、超学際研究の素晴らしさを手放しで賞賛するものではなく、むしろその手間の多さにこそ着目して編纂されました。そのような資料は多くはありません。研究者のみならず、研究機関との連携を望む企業や行政の方にも、その大変さについての「心づもり」ができるという点で、本報告書がそれなりに意義のある資料となることを願っています。

本報告書が直接扱うのは、単発イベントとしてのサマースクールですが、インタビューでは、登壇者、参加者、企画者らがこれまで携わってきた様々な学際的・超学際的な交流の経験が述べられています。これらのインタビューは、超学際研究のなかでどのようなギャップや発見が典型的に生じるかのみならず、それらのギャップや発見がどのようにして生じたのかについての示唆を含んでいます。失敗談や、諸事情でお蔵入りになった企画の経緯はあまり語られることがありません。しかし、超学際研究の経験の共有においては、このような意に沿わなかった事柄の分析と共有こそが、積極的な意味を持つでしょう。というのも、超学際的なプロジェクトは途中でやめることが難しく、場合によっては、言い出しっぺのくせに投げ出したと捉えられることもあり、そのようにして一度失った関係者からの信頼を取り戻すことは、初めて信頼関係を構築するよりもはるかに難しいためです。失敗や障壁の事例がキックオフの前を知っておくことは間違いなく有益であると、編著者らは考えています。

また、本報告書では、超学際的な交流を支援するメソッドの一つとして、サマースクールで用いられたグラフィックレコーディング（以下、グラレコ）を紹介しています。グラレコは特に、異なる背景や専門的知識をもつ参加者らの意見交換のときに用いられています。サマースクールでは、意見交換のときに参加者全員でフードスケープを描きましたが、このフードスケープを描くうえでの呼び水として、グラフィックレコーディングは多に活用されました（写真を参照）。このようなツールについても、企画者が意図した効果と、参加者が受容した効果がどれほど一致しているかについて、あまり検討されたことがありません。参加者がグラレコをどのような資源として使ったのかについても、インタビューを読んでいただければ幸いです。

今回のサマースクールは、応用哲学会のサマースクール開催支援金、ならびに、FEASTプロジェクト（「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換にむけて」プロジェクトリーダー：Steven McGreevy）、京都ファーマーズマーケットの支援を受けて開催されました。登壇者の皆さま、参加者の皆さま、会場を貸してくれた総合地球環境学研究所に感謝します。

なお、本章冊子は「報告書版」として発行されたものになります。コンテンツを追加した「ガイドブック版」は別途制作予定です。

[参考文献]

- Baumgärtner, S., Becker, C., Frank, K., Müller, B., & Quaas, M. (2008). Relating the philosophy and practice of ecological economics: The role of concepts, models, and case studies in inter-and transdisciplinary sustainability research. *Ecological Economics*, 67(3), 384-393.
- Rittel, H. W., & Webber, M. M. (1973). Dilemmas in a general theory of planning. *Policy sciences*, 4(2), 155-169.
- Brown, V. A., Harris, J. A., & Russell, J. Y. (Eds.). (2010). *Tackling wicked problems through the transdisciplinary imagination*. Earthscan.
- Frodeman, R., Klein, J. T., & Pacheco, R. C. D. S. (Eds.). (2017). *The Oxford Handbook of Interdisciplinarity*. Oxford University Press.
- Pohl, C., Krütli, P., & Stauffacher, M. (2017). Ten reflective steps for rendering research societally relevant. *GAIA-Ecological Perspectives for Science and Society*, 26(1), 43-51.

2. サマースクールの概要とタイムテーブル

a) フライヤー

私たちの日々の食卓をそのなかに含むフードシステムは、持続可能性に関わる多くの課題を含んでいます。より良いフードシステムへの「移行 / 転換」(transition: Geels&Schot, 2007; Grin&Schot, 2010) のためには、現場での様々な取り組みを断片的なままに終わらせず、そのプロセスを発信し、共有し、相乗効果を生み出す必要が指摘されています (ピサピア, 2017 他)。

しかし、フードシステムの総体は複雑で巨大であり、利害関係者らの背景や価値観は極めて多様です (Smetana et al., 2018)。そのため、より良いフードシステムへの移行 / 転換を進める実践の第一歩として、私たちの日々の食事がどのような人々の営みや生態学的条件と——産業と企業、権力と政治、市民社会、社会運動、文化、地理的要因と——つながっているかを、鳥瞰的にも経験的に理解することがあげられます。

このフードシステムの理解に資するものとして、近年注目されているのが、「フードスケープ」(foodscape) です。フードスケープとは、食べ物が生産され、運ばれ、購入され、消費され、語られる場面を指す言葉です。実際の光景でなく、想像された理想の光景も含まれます (Winson 2004; Johnston et al. 2009)。

スーパーマーケット、ファストフード店、食料専門店、コンビニエンスストア、イートイン、家庭の食卓、農場や庭園、教室、YouTube や Instagram、30 年後の食卓の想像図などをおさめた写真や映像、イラストなど、複数の具体的なフードスケープから、より良いフードシステムについての意見交換を始めることは、参加者にさまざまなサイズの関係性への想像を促し、参加者の個人的な経験や好みを、社会的・政治的・歴史的な事柄の学習に結び付ける助けとなることが指摘されています (Adema, 2010; Mikkelsen, 2011)。

今回の応用哲学会サマースクールでは、フードスケープをつなぐことを通じて、食と農のこれからについて学ぶ企画を立てました。基本となるコンセプトは以下のとおりです。

- ①登壇者の方にご講演をいただくとともに、複数の写真・映像 (フードスケープ) をお持ちいただき、
- ②参加者の皆さんとの意見交換をつうじて、“様々なフードシステムを一望するようなフードスケープ”としてまとめ、
- ③そのプロセスを記録し、分析することで、フードスケープをつなぎ、統合するプロセスのなかで何が明らかになったといえるのか、また何が新しく問われるようになったのかについて明らかにする。

ご関心のある皆さまのご参加をお待ちいたします。ご不明な点などございましたら、お気軽に担当者 (太田) までお知らせください。

[参考文献]

- Adema, P. (2010). Garlic capital of the world: Gilroy, garlic, and the making of a festive foodscape. Univ. Press of Mississippi.
- Geels, F. W., & Schot, J. (2007). Typology of sociotechnical transition pathways. *Research policy*, 36(3), 399-417.
- Grin, J., Rotmans, J., & Schot, J. (2010). *Transitions to sustainable development: new directions in the study of long term transformative change*. Routledge.
- Johnston, J., Biro, A., & MacKendrick, N. (2009). Lost in the supermarket: the corporate - organic foodscape and the struggle for food democracy. *Antipode*, 41(3), 509-532.
- Mikkelsen, B. E. (2011). Images of foodscapes: Introduction to foodscape studies and their application in the study of healthy eating out-of-home environments. *Perspectives in Public Health*, 131(5), 209-216.
- ピサピア, J. (2017). 都市食料政策ミラノ協定 : 世界諸都市からの実践報告 . のびゆく農業 , 1036, 7-61. [太田和彦、立川雅司訳]
- Smetana, S., Aganovic, K., Irmscher, S., & Heinz, V. (2018). Agri-Food Waste Streams Utilization for Development of More Sustainable Food Substitutes. In *Designing Sustainable Technologies, Products and Policies*. 145-155. Springer.
- Winson, A. (2004). Bringing political economy into the debate on the obesity epidemic. *Agriculture and Human Values* 21 (4), 299-312

2. サマースクールの概要とタイムテーブル

14:00 - 17:00 〈講堂〉	14:00 - 14:30	エンパワメントから見た戦後日本の農業 岩島史・FEAST/ 同志社大学 ※グラレコによる記録あり
	14:30 - 15:00	培養肉・昆虫食・3D フードプリンタから見た新しい食の課題 石川伸一・宮城大学 ※グラレコによる記録あり
	15:00 - 15:30	縮小社会から見た都市の農地 Christoph Rupprecht、小田龍聖・FEAST/ 地球研 ※グラレコによる記録あり
	15:30 - 15:45	〈小休憩〉
	15:45 - 17:00	意見交換会 ※参加者は講演の感想・印象を1枚のフードスケープとして描き、それを互いに見ながら意見交換を行う
17:30 - 20:00 地球研ハウス なごみ	夕食（参加費込）	
9月16日(祝):「食から見る」		
10:00 - 13:00 〈講堂〉	10:00 - 10:10	〈趣旨説明〉 昨日のふりかえり
	10:10 - 10:30	食の歴史と腸内細菌から見た土壌 太田和彦・FEAST/ 地球研 ※グラレコによる記録あり
	10:30 - 11:00	ミツバチから見た持続可能な都市 真貝理香・FEAST/ 地球研 ※グラレコによる記録あり
	11:00 - 11:30	美術と食のコスモロジー 住友文彦・アーツ前橋 ※グラレコによる記録あり
	11:30 - 11:45	〈小休憩〉
	11:45 - 13:00	意見交換会 ※参加者は講演の感想・印象を1枚のフードスケープとして描き、それを互いに見ながら意見交換を行う
13:00 - 14:00 〈地球研内〉	昼食（お弁当支給）・2日目 集合写真	
14:00 - 17:00 〈講堂〉	14:00 - 14:30	食品ロスから見た整理収納 藤枝侑夏・Moderato Style ※グラレコによる記録あり
	14:30 - 15:00	食習慣・食生産の変化から見たブータン 小林舞・FEAST/ 地球研 ※グラレコによる記録あり
	15:00 - 15:30	日本酒から見たグローカリゼーション 江口崇・Umionia ※グラレコによる記録あり
	15:30 - 15:45	〈小休憩〉
	15:45 - 17:00	意見交換会 ※参加者は講演の感想・印象を1枚のフードスケープとして描き、それを互いに見ながら意見交換を行う

18:30 - 21:00 かぜのね	懇親会（食事代 2000 円+ドリンク別途、京都市街）	
9 月 17 日（火）：「何が見えたのか？」		
10:00 - 13:00 〈講堂〉	10:00 - 10:15	〈サマースクールまとめ〉 2 日間のふりかえり + これからの関連イベント紹介
	10:15 - 11:30	グラフィック・レコーディングを見ながらの意見交換会 ※参加者は講演の感想・印象を 1 枚のフードスケープとして描き、それを互いに見ながら意見交換を行う
	11:30 - 11:45	〈小休憩〉
	11:45 - 12:00	より良い Transdisciplinary Process に向けて 神崎宣次・南山大学 ※グラレコによる記録あり
	12:00 - 12:30	意見交換会 ※参加者は講演の感想・印象を 1 枚のフードスケープとして描き、それを互いに見ながら意見交換を行う
	12:30 - 13:00	会場片付けの後、解散
かのん	昼食（希望者のみ、別途自費）	

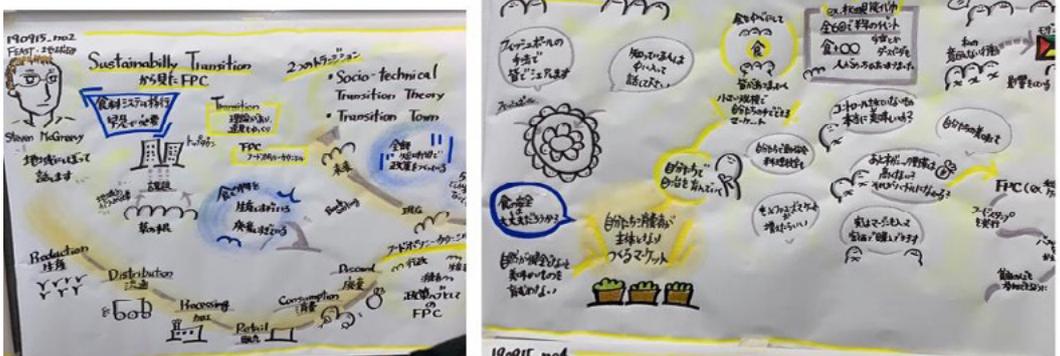
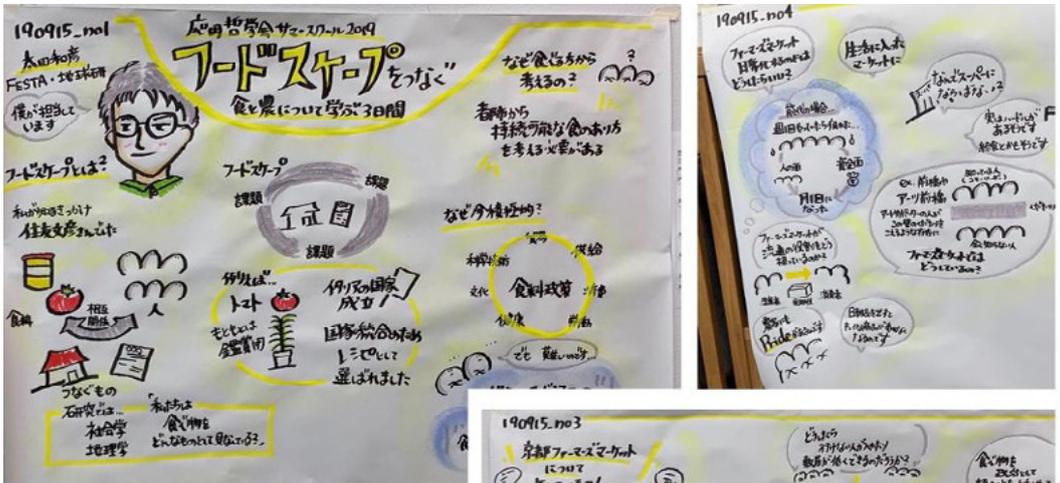
経路

- 国際会館方面より
京都バス40系統、50系統または52系統
「地球研前」バス停下車すぐ
- 京阪沿線より
「出町柳」で叡山電車鞍馬線に乗り換え
「京都精華大前」下車徒歩10分
- 上賀茂方面より
京都バス32系統、34系統、35系統
「洛北病院前」バス停下車徒歩10分



c) サマースクールの様子 (写真)

1日目



2日目



3日目



おまけ：それぞれの日のお弁当とご飯



d) 全体説明スライド

フードスケープとは何か？

- 食べ物と人々が相互につながる場所や風景を示す概念。
(Brembeck et al, 2010)
- あなたが食べものを手に入れ、調理し、その話をし、あるいは何らかの意味を見出すことのできる場所や空間について考えてみてください。それが、あなたのフードスケープです。
(MacKendrick 2014)

例えば…

台所、ダイニング、スーパーマーケット、コンビニ、農場（大規模農場～家庭菜園）、教室、テレビのグルメ番組、Instagram、広告、想像上の料理（未来の食卓）など



社会学や地理学では、「私たちは食べ物をどんなものと見なしているか？」を分析するための資料として使われています。

教育現場では、「日々の食卓からは見えない風景」への広く豊かな想像を養うきっかけに使われています。





なぜフードスケープなのか？

フードスケープは、社会のいろいろな側面や課題を、食を「レンズ」にして見つけるきっかけを提供する。

(Mikkelsen, 2011)

例えば…

- 好きな食べ物や、毎日の家族の食事は、いつから“そういうもの”として当たり前で食べられるようになったのか？
- 私たちが手に入れる食べ物はどこから来たのか、誰が作っているのか？
どのように運ばれ、そして捨てた後にどこに行くのか？
そこにはどんな課題があるのか？
- 私たちの食は、気候変動、法制度や国際関係、文化、マーケティングからどのような影響を受けているのか？

などなど



「広く豊かな想像力を養う」と言っていたことですね。

ばらばらの知識や情報を、連なった風景(-scape)として捉えることができるのが良いところです。



- ・ イタリアでトマトソースが広まったのは**150年ほど前**。
- ・ 大航海時代に輸入されたトマトは**観賞用**で、食用ではなかった。
- ・ トマトソースのパスタが広まったきっかけは、「イタリア」という**国家統合のためのレシピ**の一つに選ばれたから。



TEORICO-PRATICA

CUMULATIVAMENTE

COL SUO CORRISPONDENTE RIPOSTO

PIUCCOLA PARTE

APPROSSIMATIVA DELLA SPESA

CON LA PRATICA DI MACILARE, E COME SERVIRSI DEI FRAPPI E CERE

Che vengono condifurati da *direrri. diaryni in Litografia*

finalitate

QUATTRO SETTIMANE

ACCORDO LE STAGIONI

DELLA VERA CUCINA CASARECCIA

IN DIALETTO NAPOLETANO

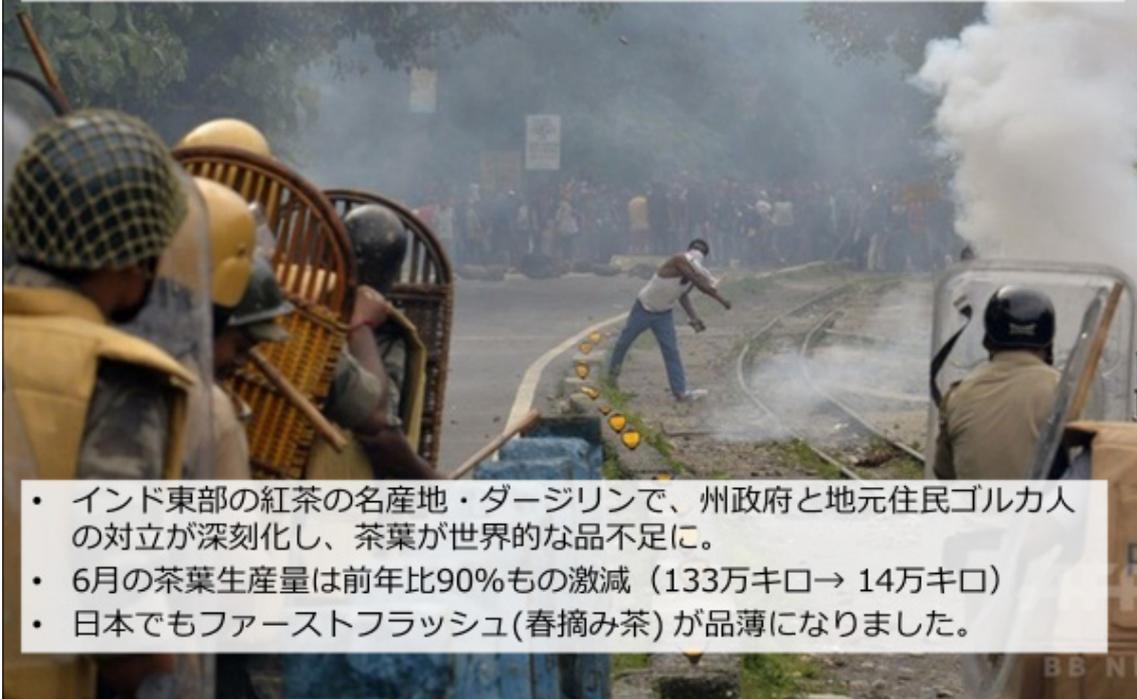
CUMPOSTA

DAL CAV. SIG. IPPOLITO CAVAGARETTI

ダージリンの対立激化で紅茶不足深刻、収穫9割減 数年影響の恐れ

2017年8月4日

AFP



- ・ インド東部の紅茶の名産地・ダージリンで、州政府と地元住民ゴルカ人の対立が深刻化し、茶葉が世界的な品不足に。
- ・ 6月の茶葉生産量は前年比90%もの激減（133万キロ→14万キロ）
- ・ 日本でもファーストフラッシュ(春摘み茶)が品薄になりました。

1978	136x	Marmel. + Jelle	
1977	100x	"	1989
1979	132x	"	2000
1980	142x	"	
1981	83	glacé	
1982	135	"	
1983	80	"	2002
1984	100	"	
1986	5	"	
1987	38	"	
1988	56	"	
1989	111	"	
1990	85	"	
1991	64	"	Aug-1
1992	75	"	Sept. 2
1993	108	"	
1994	101	"	
1995	86	"	
1996	47	"	
1997	49	"	
1998	49	"	

1986年4月26日
チェルノブイリ原発事故




なぜ食べる方から考えるのか？

都市から、持続可能な食のあり方を考える必要がある。

(ジュリアーノ, 2017)



MILANO 2015
NUTRIRE IL PIANETA
ENERGIA PER LA VITA



©www.expo2015.org



- 2015年のミラノ万博で、「都市食料政策ミラノ協定」が調印。
(2019年4月に200都市を突破)
- 世界人口の半分以上が都市に住んでいる。
- 消費のあり方が変わらなければ、生産や流通のあり方は変わらない。
 - 「買い物は投票です」
 - 「私たちは消費者である前に、市民です」



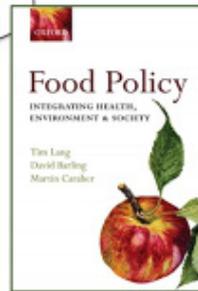
なぜ食べる方から考えることに、みんな積極的なのか？

食に関わる政策は、健康と、環境と、社会を結びつける。

(Lang et al, 2009)



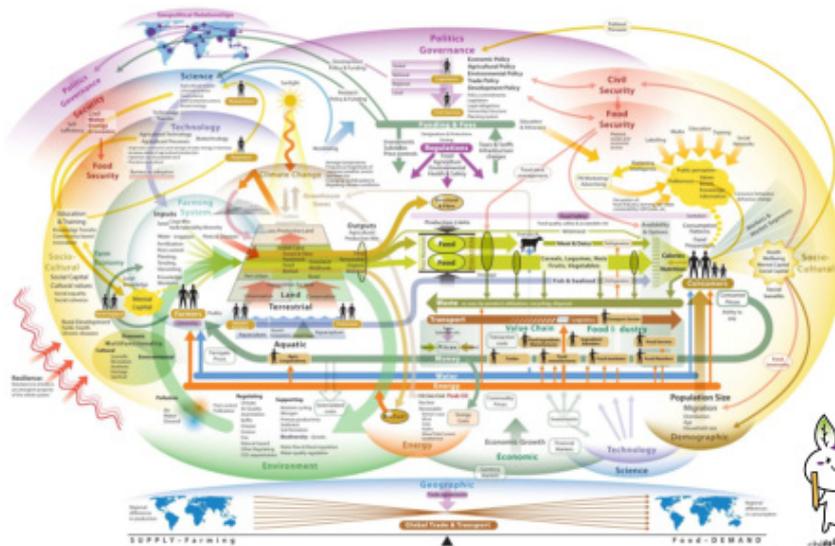
- 縦割りだった事業や部署が、食をテーマに連携することができる。
 > 「食がこの町に何をしてくれるかを考えよう」



食べる方から考えることの、難しさは何か？

関係者の数も種類も膨大で、望ましいフードシステムのあり方の合意をとるのはとても難しい。

(Smetana et al, 2018)



食べる方から考えることの、難しさは何か？

もう少し詳しく①：「厄介な問題」

“望ましいフードシステムのあり方”には正解がない。
ある問題の解決が、別の問題を生み出す。

(Camillus, 2008)

問題の種類と特徴

問題の種類 \ アウトプット	あいたい姿・あるべき姿	課題・論点	ソリューション
単純な問題 例) 会議の結果を共有したい	◎ 正解がある	◎ 比較的容易に整理できる	◎ 明らかな解決方法があり、マニュアル化できる
複雑な問題 例) 会議の生産性を高めたい	◎ 正解がある	○ 複雑でも十分整理できる	△ 時間をかければ正解を見出すことができる
やっかいな問題 例) 変革の時代における会議運営のあるべき姿とは？	? そもそも正解が存在しない	? ゼロから考える必要がある	? リーン型で解く必要がある



食べる方から考えることの、難しさは何か？

もう少し詳しく②：食をめぐるナラティブの多さ

食の語り方 (ナラティブ) の違いに、人々はわりと無自覚。

(Kaplan, 2016)

ナラティブの種類	語られる場面	内容
①科学と政策決定	科学者の発信 政策決定	<ul style="list-style-type: none"> 因果関係を説明し、予測し、対処することが重要。 データを集め、現状を正確に分析することを重視。
②テクノユートピア	民間企業 発展途上国	<ul style="list-style-type: none"> 技術の発展こそが、持続可能な社会を作り出す。 GMOや培養肉などのフードテックに可能性を見る。
③テクノフォビア	地産地消運動 有機農産運動	<ul style="list-style-type: none"> 日々の生活は、いまや技術に振り回されている状態。 シンプルで自然と調和のとれた生活に可能性を見る。
④ロマン主義	スピリチュアリズム	<ul style="list-style-type: none"> 食べ物は、単なる栄養素ではない。 食べることは、自然や先祖と精神的につながる経路。
⑤農者 (agrarian)	農本主義	<ul style="list-style-type: none"> 農林水産業を、私たちの道徳と文化の源とみる。 土地との深い関わりが、アイデンティティを育む。
⑥資本主義の矛盾	ドキュメンタリー	<ul style="list-style-type: none"> 安い食べ物の本当の値段：労働者は搾取され、規制は無視され、環境は汚染され、動物は虐げられている。
⑦発展途上国支援	ユネスコなどの国際機関	<ul style="list-style-type: none"> まだ世界の飢餓問題は解決していない。 識字率や生活水準の低さ、ジェンダー問題が焦点。
⑧旅行記	ドキュメンタリー	<ul style="list-style-type: none"> 生産地から食卓に届けられるまでの食べ物の変化と、関わる人々と環境の多彩さを知ることが重要。

フードスケープを使って社会課題を見直したり、
フードスケープを社会課題から見返したり、
フードスケープについて話し合ったり、
フードスケープをつないだりすることで、
私たちは食に関わる「厄介な問題」や、ナラティブの
違いに取り組むことができるのではないか？



3. インタビュー

【インタビュー】 神崎さん・谷口さん (2020.04.25)

当日、オンライン会議ツール「Zoom」を利用し行われた。神崎・谷口両氏の話、太田がメモをしつつ、そのメモを両氏がリアルタイムで見ながら話している。

▼グラフィックレコーディングされる側の違和感

【谷口】 2020年度の応哲大会¹の、私たちのワークショップの抽象クトを読んでいて関心があったことは、「グラレコをされる側の違和感」でした。レコーダーとしては、どこに対して違和感がありうるのか、その違和感はどこからくるものなのかについて、ぜひうかがいたいと思います。

【神崎】 違和感のひとつの源として、文字と絵との違いがあると思います。もちろん話したことと絵が一对一対応ではないのはわかっているのですが、「これは自分が言ったことなのか？」というのがあります。

【谷口】 なるほど。どういう場所でグラレコをするかによって、違和感の強弱は異なるのかもしれないですね。座談会のような集まりでのレコーディングだと、発言内容そのものより、場自体の話の流れがレコードされる感じですが、今回のサマスの話題提供は、学会発表みたいな形だったので、話の流れというよりも発言内容への着目が強くなる。「報告が正確に写し取られているか？」という意識が強くなる。

企業でもそうですが、研究報告では、一つ一つの言葉についてのこだわりや位置づけがはっきりしている。それらの言葉の意味解釈が合っているかは、描きながらも意識しています。じっさいにサマースクールでは、「この理解で、この言葉で合っているか？」という点には、かなり気をつけていました。口に出した言葉はその場で消えていくものですが、それが資料集として載るといことになると、後からもう一度見られる可能性が高い「記録」としての性格が強くなるので。

【神崎】 サマスのアンケートは気になりますね。使っている言葉が違う人たちと、どのように話していくか。そこにグラレコは寄与すると思う反面、レコーダーの専門性もまた問われるという感じがあります。

翻訳者に分野があるように、グラフィックレコーディングにも得意な分野がありますか？

【谷口】 はい、あると思います。分野によって、言葉の重みづけが異なるものがあります。例えば、分野Aではどうということのない言葉が、別の分野Bでは非常に強い意味づけがあるということがあります。その点、サマスのはいけそうな感じがありました。真貝さんの蜜蜂や住友さんのアートの話など、自分の理解の範疇をそれほど超えないだろうなという推測がありました。

【神崎】 言葉の重みづけが異なるというのは、超学際研究にとってのハードルの高さでもあるように思えます。言葉の意味づけや重みづけが異なることが、グラレコを通じて明示化されれば、研究者にとっての、研究手法の一つとしてのグラレコの役割が見えてくるように思えます。レコーダーがわかっていると、他の聴衆もわかっ

1 応用哲学会 2020 年度大会は COVID-19 の感染拡大のため書面開催となった。

ていない可能性が高いので。

「翻訳者」という立ち位置は、じっさいに超学際研究でも注目されています。"両側に属している人"としての翻訳者です。たとえば、地域にある学校の生物の先生が、地域の人々と生態学者のつながりをつくることができたりなど。グラフィックレコーダーはどのようなタイプの「翻訳者」だといえるのでしょうか？²

【谷口】 翻訳者とグラフィックレコーダーの違いは、事前知識をどの程度知っておくかがポイントになるところだと思います。その分野について知りすぎていると、まったく事前知識がない聴衆にうまく伝わらない。もちろん知らな過ぎても、話者が何を話しているかわからなるので、どうまとめてよいかわからなくなります。

また、「翻訳者」というよりも「編集者」に近いかもしれません。話者の言葉をそのまま翻訳して伝えるのではなく、言葉と絵に変換して伝えるのは、違うので。編集のプロセスで、話者の言っていることがだいぶ変容してしまうことがあります。その結果、「自分の伝えたい言葉が伝わらなかった」ということがないようにしている。

①自分が発話者の話をどのくらい理解できているのか、②聴衆にどのような補助線を提供できているのかについて、いつも意識を向けています。

▼グラフィックレコーダーが気にかけていること

【神崎】 超学際研究の場では、そもそも講演タイプの発信が求められているのではないのかもしれない。その場で、お互いの意見を表明するとともに、お互いの意見や見解を変えたりする場が必要。もしかしたら、研究者が普段やっていることがTDの場にそぐわないということの違和感が、グラレコの違和感と重ねられているのかもしれない。超学際的交流の場で、「自分の発言が正確に写し取られているかどうか」という観点からグラレコに多くを求めるという状態が、じつはミスマッチなのかも。

グラレコ全体のデザインについて今回のサマースクールで気を付けていたことはありますか？

【谷口】 今回のサマースクールでは、若干、イラストを多めにしていました。同じ前提知識を持つ人が集まる場では、文字を多めにしています。

【神崎】 あと、これもうかがいたかったのですが、谷口さんのグラレコは、流れが左上から右下、という流れが明瞭に示されていますが、これは場によって変わるのでしょいか？

【谷口】 はい、変わります。ワークショップやアイデアソンなど、グラレコが入る場はいろいろあります。例えば、アイデアソンなら、中央にキーワードをおいて、放射状に描きます。あと、聞き手やどこでグラレコするか、という外部要因もあります。

今回のサマースクールでは、たくさんの方が講演をする形式だったので、フォーマットを揃えました。また、イベント後に報告書になるということを知っていたので、その場になかった人も一見して概要がわかるようにしたいと思い、ストーリーを明瞭にして、ひとつの講演を一枚にまとめるようにしました。

【神崎】 まとめるときに気にされていることはありますか？

2 このあたりの話は、神崎が参加していた地球研の「地域環境知プロジェクト」で検討されていた。

<https://www.chikyu.ac.jp/rihn/project/E-05.html> (最終アクセス 2021 年 2 月 8 日)などを参照のこと。)

【谷口】 こっちの話とこっちの話がつながるんですね、というのがわかるように心がけています。話が戻ってくるタイプの話し手の場合は、矢印でつないだり、そもそも空白を多めにとって、後から書き込めるようにしたりなど。話が戻ってくるときに、新しい視点が追加されていることもあるので、そのときはその場で判断しています。

【神崎】 前に「編集者」に近いとお話しされていましたが、どのように描くものと描かないものを判断しているのですか？

【谷口】 全体のデザインを構成して、この話なら、この位置・この文字の大きさ・絵と文字の配分…などを現場で判断しています。話し手の声が大きくなったり、何度も繰り返される言葉については、強調します。そして、話し手の表情なども追記していきます。そして、「このような整理でどうでしょう？」と適宜質問して、書き落としている重要な要素、誤解がないかどうか確認する、という流れです。

【神崎】 そういえば、話し手は、話しながら、グラフィックレコーディングをリアルタイムで見ているわけではありません。話し終わった後でグラレコを見ると、一望して、「あれこんなこと話したかな？」という感じになる。それが違和感の一つの原因かも。別の研究で、複数人の会話から話題を示すと思われる語を抽出して可視化するシステムについて協働研究しているのですが、そのシステムでも、リアルタイムでは見ない人が多いです。でも、自分の話したことを途中で見て、それを土台にして、話を展開するということもあるはずだと考えています。

グラレコを、話者を含む参加者がどのように利用するかは、どのように決めていますか？

【谷口】 グラレコの使い方については、主催者が環境・導線を作る必要がありますね。サマースクールの場合、事前の打ち合わせに太田さんに、登壇者と参加者に、「グラレコが入ります」、「グラレコはどういうふうに活用できるか」を伝えてください、とお願いしていました。例えば、サマスクの場合は、「グラレコを、フードスケープを作る参考にしてください！」「グラレコに戻りながら話し、自分(たち)が何をどのように話しているかについて、確認してください」、「話し手が迷子になってしまっているときに、グラレコに戻ってください」と使い方が提示されていました。この、登壇者・聞き手・主催者・レコーダーのあいだの連携・共有があると良いですね。一般的に、グラレコには、話したことが場に受け止められているか、自分が主体的に入る場であるかどうか、意見が言えるかどうか、それがどのように次の話とつながっていくか、ということの確認や安心感が得られるという効果もあります。参加者目線だと、「自分の理解、外れていませんか？」を確認できます。しかし、グラレコの使い方は、やはり参加者の皆さんとある程度共有されていた方が良いですね。レコーダー目線だと、「このグラレコ、何のためにやってるんだらう？」という、存在価値がわからないレコーディングをするのは、けっこう厳しいものがあります。

【神崎】 よく、ファシリテーターは積極的に発言しないのが良いとされます。しかし、場を作るときに、ある種の主体的な介入をする必要もある。そのとき、ファシリテーションの一つの手段として、レコーダーが入るときに、レコーダー自身の主体性や介入について、どのように考えていますか？

【谷口】 「自分も含めて、創造的な場を作れるか？」が私自身のミッションだと考えています。なので、あるテー

マに関して、どのようにすれば意見交換が活発化するか？ それに応じて、意見を挟むときもあるし、挟まないときもあります。話さなかったとしても、自分の**行動**によって場が良い方向に変われば、それでよいと。

レコーダーの主体性や介入のなかには、グラレコに何を書くか、書かないかの選択も関わってきます。話し合いのなかでは、ポジティブの内容だけでなく、ネガティブの内容、センシティブの内容も出てきます。必ずしも書かなくてよいことなら書かないし、書く必要がある・書いてほしいと発話者が望んでいると考えたら、書きます。グラレコをとること自体が、介入なので、たぶん、それはグラレコに対する違和感ともつながっていますね。

【神崎】 グラレコの場合では、ポジティブなお願い（とってほしい）と、ネガティブなお願い（とってほしくない）ではどちらが多いですか？

【谷口】 ケースバイケースですね。レコードしてほしくないという場合には、話し手の方が、「この場は自分の意見を話す場である」、「ディスカッションするために来ているわけではない」と考えている場合です。ファシリテーターに入ってほしくない、と感じているときもあるので、そういう場合については確認するようにしています。

また、これは先ほどのグラレコの使い方とも関わるのですが、参加者の方がどのようにグラレコを活用すればよいかわからない場合にはネガティブなお願いが増える傾向があります。休憩時間にグラレコを見てみましょう、と言われても、**読み方・活用方法**がわからないと、放り出されているような感じになるでしょう。グラレコは単純な意味での記録ではない。では、これは何なのか？ どう活用すればよいか？ これがわからないと、やはり消極的になると思います。

レコードしてほしいといわれるのは、グループでの議論が迷子になっているときです。レコーダーの側の編集によって、話の方向性が見えてくることがあります。

グラレコはファシリテーションの一つとしてあるように見られることがありますが、「グラレコ」と「ファシリ」の役割は別ものだと思います。「ファシリ」は言語的に訴えかけるところが大きく、より主催者に寄っています。船頭さんの役割です。一方で、「グラレコ」は、船に乗った人としての参加者が見えていないところなどを可視化する役割です。運営の方や登壇者の方が、何を考えていて、どういう方向性で場を作ろうとしているかを、現場で休憩時間とかにそれを察知しながら、レコーディングをしています。だから、グラレコをしつつ、ファシリテーションからは引いているということがあります。

【神崎】 話すスピードよりも描くスピードの方が遅いわけですが、どれくらいバッファをとっていますか？ 追いつけないときに進んでしまっている話を、どのように処理し、取捨選択をしているのでしょうか？

【谷口】 相手が何を話したいかを把握して、そのうえで整理して描いています。基本的に、声の大きいところ、くり返し出てくるところについては記録するようにしています。でも、研究者は淡々と話す人が多いんですよね。書けることは、ほんの一部で、そのなかで、書けないことについては、諦めています。

【神崎】 追いつけない部分が増えてくる、ということはありますか？

【谷口】 あることはありますが、「ここはこういう場で、こういうことを話します」という設定が明確であれば、「このテーマと関連づけて、〇〇を話している」ということが理解できるので楽です。講演の場合は、起承転結が明

確であると、書き留めやすいです。もちろん、戻つばみの場合もありますが。

【神崎】 話者から苦情が来ることはありますか？

【谷口】 苦情ではなく、修正依頼は多いですね。大阪でグラレコしたときには、参加者の方が「そこちゃうで」と指摘してくれますし、サマースクールでは、例えば真貝さんからいくつか修正依頼をいただきました。あと、京都でグラレコしたときに、もっと文字を大きくしてとお願いされたことがありますが、これは、紙の面積・枚数制限でなかなか難しかったりします…。

【神崎】 「修正して、ということであれば、修正できる」ということがわかると、話者としてはかなり安心ですね。リアルタイムだと、修正できないような感じを持つ人もいるように思います。修正が効く、ということがわかると、違和感が軽減されるかも。

【谷口】 「グラレコは、作品ではない」という認識は共有したい。グラレコは、場における資源です。聞き逃していたこと、理解の手助けをするもの。だから、違うな、と思うところがあれば、積極的にレコーダーと話していただければと思います。

[インタビュー] 井頭昌彦さん (2020.6.22)

▼「なぜ話がかみ合っていないのかを解説する係」

[太田] 2019年9月の応哲サマースクール（以下、サマस्क）にご参加いただき、ありがとうございました。アンケートの方でグラフィック・レコーディング（以下、グラレコ）にご関心をいただいておりますが、井頭さんの現在のご活動でも実際になさったことはありますか？

[井頭] まだないです。自分がやろうとしている超学際研究のプロジェクトがあるのですが、そこで谷口さんをお呼びして、考え方の違う人たちが集まったときのコミュニケーションを円滑化するのに一役かってもらおうと思っていました。でも、新型コロナでその計画を見直さなければならなくなって、お呼びするチャンスがなくなってしまったんです。なので、実際に使ってみる段階には至っていません。

なぜお呼びしようと思ったかという、Transdisciplinary（以下、TD）、アカデミズム以外の人を含む意見交換がサマस्कでもあったわけですが、そこでグラレコが有益そうだったんです。アカデミックな議論のトレーニングを積んでいる人同士の議論だと、いろいろなことをさっぴいたり、そもそも問題関心の持ち方が似通っている、そこまでトラブルが発生しないのですが、NPO/NGOとか企業の方とかと議論するときには、議論の仕方だけでなく、目的意識や価値観が大きく違うこともあり、そういうところが障害になるかなと思っています。その障害を解消したり、あるいは少しでも緩和するうえで、グラレコは役に立ちそうだなと思いました。

TDを私はほとんどやったことがなかったのですが、その体験ができたのはサマスクの良かったところで、障害に対するひとつのソリューションとしてグラレコがありうるなという発見もありました。

[太田] ありがとうございます。井頭さんの関わっている、例えば水産資源に関する超学際研究¹のご活動のなかで、井頭さんはどのような役割を担われているのか、お聞かせいただけますか。

[井頭] まだそこではTDの活動そのものにタッチしていない状態です。フィールドに出られている先生方は、そういうテーマをまさに扱っています。代表者の赤嶺先生は、捕鯨問題を扱っているのですが捕鯨なんてTDの典型例ともいえるものです。私の役割は、そうやってTDに身を置いている、別々のディシプリンのなかで仕事をしている方たちが、複数集まってきたところでの意見調整です。意見がすれ違っていることに慣れている人と、慣れていない人がいると思うんですね。自分が身を置いているフィールドやディシプリンのなかで活動している分には、意見のすれ違いはそれほど起こらないのですが、僕は渡り鳥のようにいろいろなところをうろうろしているので（笑）、ああ、話がかみ合っていないな、どこがかみ合っていないのかな、ということを考える機会が結構あります。だから、「お互いの枠組みのどこがどうずれているせいで、話がかみ合っていないのかを解説する係」ですね。

[太田] なるほど。確かに、お互いの枠組みがどのようにずれているかを可視化するうえで、グラレコは使えそうですね。

[井頭] あと、すれ違いに慣れていることと、言語化することに慣れているということは、哲学者がTDに参加

1 科研費「重層化する不確実性へのレジリエンス：水産物サプライチェーン研究の課題と実践」研究代表者：赤嶺淳

しやすいところかなと思っています。グラレコは哲学とは違う側面で寄与できると思います。哲学に関していえば、すれ違いが生じたときに、「何かかみあっていないね」というふんわりした感想ではなくて、すれ違いが生じている状況を言語的に腑分けすることができるというのが大きな特徴だと思います。

【太田】 これはやや突っ込んだ質問となるのですが、井頭さんの現時点の所見として、TDの実践における切迫した課題として、「意見のすれ違いに慣れている人と、慣れていない人がいる」という状況があると思われませんか？例えば、今回のサマスクの後のアンケートでも別の方からご指摘いただいたのですが、結構意見を同じくする人がまとまってしまう傾向があったり、あと、いろいろなグループを行き来している人は意見のすれ違いがあることに慣れているが、全員がそういうわけではない…という状況がありました。

【井頭】 まだわからないですね。これからそういう状況を経験させてもらって、そこでどんな揉め事が発生するかを見せてもらってから、何か考えられるかなといったところですね。応哲のサマースクールで一例を初めて見ました。

【太田】 サマスクで、「ああ、ここはお互いの枠組みがくい違っていたな」と感じた事例として、思い出すことがありましたら教えていただけますか。

【井頭】 Stevenさんと真貝さんのご講演をうかがっているときに同じことを思ったのですが、お二人とも、「どうするのが望ましいのか」が先に決まっている状況で、「どうすればその望ましい状況を実現できるのか」に焦点化するお話をしていたように思います。でも、例えば環境倫理学では、そもそも「どうするのが望ましいのか」が着陸していないまま議論をすることが多いので、哲学畑の人間からすると、そこには違和感を覚えました。「どうするのが望ましいのか」が正当化されないまま、政策提案とかの話に行っちゃっていいのかなど。そこで、まず僕と、地球研の方々とのあいだに距離を感じました。

【太田】 「どうするのが望ましいのか」を、どういうステップで正当化したのが説明されていなかったというところですね。

【井頭】 そうですね。地球研の皆さんにとって、ここは議論の余地がないところなのか、と思いました。そこでは、お互いに関心の置き所がずれている。そういう状況のなかで、この具体的な問題について議論しましょう、と話を進めてしまうと、ちょっと不思議な感じになるなど。

後で真貝さんとお話したときには、確かにそこを考えないといけないですよ、ということがうまく共有できたのですが、Stevenさんとは、僕のコミュニケーションの取り方があまりうまくなかったからかもしれないのですが、あんまり取り合ってくれませんでした（笑）あんまり記憶が定かではないのですが、たしか「結果はすでに出ている」というようなお話でした。

【太田】 なるほど（笑）現状のままだとこういう事態が予測される、そのデータはすでに揃っている、だから、いまの社会システムをこういうあり方に変えなければならない、という論調でしょうか。

【井頭】 そうですね。こちらのスキルや知識も足りなかったのかもしれないですけど。

▼グラレコを見ながら議論する機会を増やす

【井頭】 違う話になるのですが、グラレコを参照する機会が多いほうが良かったなと思いました。Stevenさんと僕の質疑はオープンな場でなされたと思うのですが、そういう質疑応答をノートしたグラレコは、あとで「そういえば、ここの話をしていなかったね」と話を戻す機会になるので、もっとグラレコを見ながら議論する時間があってもいいなと思いました。特に、すれ違いの解消に使えるのではないかと思ったことを憶えています。

【太田】 たしかに、グラレコを見ながら議論する機会を増やすというご提案は、アンケートや事後の振り返り会でもいただいています。これはちょっとおうかがいしたいのですが、井頭さんがグラレコと提題を行き来するようなイベントを開催するとしたら、どのようにその機会を増やしますか？ けっこう悩みどころで、今回は、参加された皆さんに、それぞれのフードスケープを描いていただくときにグラレコを参照してください、というふうにもっていたのですが。

【井頭】 これ、難しいですね。今回はハコが大きくて、人数も多かったのでなかなか難しいと思いました。自分がいまやっている科研費のプロジェクトは、メンバーが10人くらいなんです。それだとやりやすいかなど。

【太田】 確かに、人数はこういうイベントのあり方を決める大きな要因ですね。

【井頭】 あと、僕はこういう連続講演のときとか、休憩時間のときに、発表者と話すことがけっこうあるんですけど、そういうときに目の前にグラレコがあるとすごく便利だと思います。今回のサマスクでは、Stevenさんの講演のあと、京都ファーマーズマーケットに関するフィッシュボウルがあって、小休憩をはさんで質疑応答、という流れでしたが、この小休憩のときにグラレコがもっと見られるようになっていて良いなと思いました。

【太田】 今回は講演室の壁で記録をとってもらいましたが、グラレコの紙を移動できるようにする、という工夫は地味に重要かもしれませんね。あと、ナッジを作る——お菓子とかお茶があるテーブルをグラレコの紙の近くに置くようにするとか——のも、次にやってみたいです。

【井頭】 谷口さんからは、グラレコの効果的な使い方について何かお話はあったのですか？

【太田】 例えば、グラレコをなぜしているかについての趣旨を運営の方から説明してください、グラレコを見直す時間を作ってください、というお話はいただきました。今回のサマスクでは、グラレコを、フードスケープを描くための素材として位置づけたのですが、そうではなくて、井頭さんがおっしゃったように小休憩のときの議論でも使えるような導線を作れると良さそうです。「グラレコを見ながら、話す」と「グラレコを見ながら、手を動かす」は別の効果がありそうです。

▼いろいろな話し方

【太田】 今回のサマスクで、井頭さんが得た大きな発見や変化がありましたら教えていただけますでしょうか。

【井頭】 TDは、「自分の思考の枠組みから出ていく」部分が大きいことを実感しました。あと、配慮スキルが自分には足りな過ぎたな、という気づきがありました。つい、学術的な議論の場のしゃべり方をしているんですよ。

【太田】 配慮スキルについて、もう少しうかがってもよろしいですか？

【井頭】 二つあります。一つは、一回で処理できる情報の量が、議論に参加する人によって変わってくると思うんです。分析哲学者は、論理の展開を追うのに慣れてるので、4ステップくらい一気に話しても大丈夫なのですが、たぶん、違う分野の哲学の人もそうだし、カデミックにいない人も、そういう話し方には慣れていない。だから、ステップが多すぎると、わからなくなってしまうことがありました。

もう一つは、議論の仕方です。主張に対する反論が称揚される文化が、特に分析哲学系には多いのですが、アメリカ哲学会とかにあって教育哲学系の方たちと議論すると、皆さん、まず誉めて、高めてくれた後で、ところでこの点についてなのですが…と質問をするのですよね。でも、僕はことここは両立しないのではないか、ということいきなりすば一んと言ってしまうので驚かれることがあります。これは別に教育哲学対分析哲学という話ではなくて、この辺、うまくできていなかったなと自分にはがっかりしました。

【太田】 もしよろしければ、どういう場面でそういう配慮スキルの必要性を感じたかも、うかがって良いですか？

【井頭】 けっこう僕が発言するたびに思った記憶があります（笑）

【太田】（笑） ちなみに、アンケートのなかで、サマスクのあいだに影響を受けた人として井頭さんのお名前をあげていた方が何人かいらしたのですが、その方は井頭さんがぼらぼらのフードスケープを筋立ててまとめてくれたという点に衝撃を受けていました。たぶん、いまお話いただいた論理を何ステップか展開するところが参加者にとって新鮮だったのではと思います。

【井頭】 あと、懇親会で住友さんと話していて、住友さんから「なるほどそう来ますか、それなら私もこういう感じでお答えしましょう」という応対をさせていただいたんですけど、そのときに指し手の順番が違ったかもしれないという感じを受けました。「まずこれやってから、こうだよ」という型がそれぞれの文化圏にはあると思うのですが、そこに違反してしまった感じをすごく受けましたね。

あと、忘れないうちに、懇親会のときには初めて気づいたんですけど、お子さん連れてこられている方がいて、そういう参加の仕方ができるのは素晴らしいと思いました。TDだといろいろな事情を抱えている方が参加者になるし、そのいろいろな事情の幅もぐっと広がるので、通常よりも対応力を大きくとらなければならないなど。「どういふ対応をすると、参加しやすいか？」ということを考えないといけないなと思いました。声を発しにくい、拾い上げられにくい人の声を拾うためには、そもそもその方たちが拾い上げられにくい状況にいることが多いので、より一層の配慮が求められるという印象を受けました。

【太田】ここ数年で、託児サービスが受けられる学会も増えていきますよね。少し別の話になりますが、何年か前の応用哲学会の懇親会の立食パーティにビーガンメニューが出されていたことがあって、素晴らしいなと思いました。そういう配慮が広く当たり前になっていけばと思います。

▼「価値自由」(value free)について

【太田】アンケートで、「政治的意思決定の問題と学術的妥当性の問題とが混ざってしまっている議論が目についた(社会科学ではありがちなことだが)。value free ideal についての 21 世紀の議論をもう少し参照すべきだと思った」というコメントをいただいていたのですが、ここについて、もう少しご説明いただいてもよろしいでしょうか。

【井頭】value free は価値自由と訳されていて、「どのような政治的価値を奉じている人にとっても妥当と考えられるような知見を組み立てるのが科学である。科学は価値から自由でなければならない」という理念です。もともとマックス・ウェーバーの議論に由来しています。自然科学において価値自由は当然だと考えられています。社会科学においては研究テーマの立ち上げの段階で、「これは重要であるから取り上げなければならない」という価値観が入ってきているので、価値自由は要求できないもの、実現できないもの、という一般的な傾向がありました。でも、自然科学でもファンドをとって研究をする以上、社会からの負託を受けるわけで、説明責任的な観点からも価値は入ってきているわけです。そうすると、「完全な価値自由なんてありえないじゃないか、価値が入っていても問題ないよ」という結論が導けそうなのですが、21 世紀に入ってからそんな雑な結論じゃだめだという議論がなされています。

価値自由にもいろいろなフェーズがあります。大きく 3 つに分けられます：①何を研究するのか。②研究した内容を正当化する手続きを、さまざまな政治的価値からどのように独立にするのか。③科学研究から当為(「〜すべし」)をどう導けるのか。これら 3 つに分けて、検討しないとだめだよ、というのが標準認識になっているのですが、そこをすっ飛ばして「価値から離れた社会科学研究ができるなんて、お前の頭はお花畑か」という話になってしまいがちなんですよ。そんなことはなくて、例えば、②に関しては、取得したデータを見せないで恣意的に解釈・加工して自説の正当化の補強に使うというのはだめなわけです。これは広く共有されていると思います。①については何を研究するのかについての選択に価値が入るのは免れ得ないという認識になっています。それぞれのフェーズごとに、「やってはいけないこと」についての検討が練りあがっているのです。

【太田】こういう「やってはいけないこと」については、例えばチェックリストや振り返りシートでカバーすることができるものなのではないでしょうか。プラクティカルな話になりますが…。

【井頭】②については研究倫理のトレーニングなどを受ける機会があるかと思うのですが、それにはとどまるものではないです。リストがあって、それをブロックすれば良いという話ではありません。ここは難しいところで、フェミニズム的なアプローチがどこまで科学的なアプローチとして成立するかという議論——例えば、差別構造を暴露して啓蒙に導くというような活動が社会科学のなかでなされることがあるわけですが、それをどこまで OK にするか、マキャベリズムをどこまでブロックするか…などの議論と結びつくことになります。

今回のサマスクで、Steven さんや真貝さんの話を聞いて感じたこととこの話はリンクしていて、価値自由に配慮した学術的手続きにもとづいてなされた提言なのか、それとも特定の価値を奉じている人たちの意見を反映したうでの提言なのか、あまり区別がなされていないように見受けられました。

例えば、「これだけの食べ物が捨てられています。これはまずいですよ」という話を Steven さんがなさっていたのですが、「これだけの食べ物が捨てられている」という事実に関する事柄と、「まずいです」という価値判断は直結しないこともあるわけですよね。ある程度のロスが出ることによってシステムが効率を維持しているという側面もあるはずですから。

[太田] 事実認識から価値判断が出てくるまでのプロセスが明らかになっていない、検討されていないのでは？という疑念があると、最初に井頭さんがお話されていた、問題を共有するとうっかりができない、という話になるのでしょうか。

[井頭] そうです。ステーキホルダーのそれぞれ違う価値観をもって、違う事情を抱えているわけですよね。それぞれの観点があることをすっ飛ばして、「まずいじゃないですか」という価値観を掲げられるとびっくりする。TD の多様な価値観を考慮すると、この価値自由の理念をどこまで実現できるかは別として、「どの立場の人でも共有できるのは、ここだ」という事柄を整理しておくのは大事なことだと思います。

[太田] 確かに、全部は共有できないにしても、あるトピックに関して、どんな価値観を奉じている人であってもここまでは共有できるはずだ、ここからは共有できるかわからない、という点について検討する作業は、TD のそれぞれの実践を進めていく足場を作る上で重要ですね。

こういう価値自由について勉強するにはどんな本を読めばいいか、お勧めいただけますでしょうか。

[井頭] いまちょうど訳している社会科学の哲学の入門書があります²。その本の参考文献リストからたどるのがよいかと思います。TD というより、価値自由の議論の現状についてですね。

[太田] ありがとうございます。ひとまず、おうかがいできればと思っていたことは異常なのですが、井頭さんの方からご質問などございますか？

[井頭] そうですね。現状、僕が議論できているのは、アカデミックな範囲のなかでのコミュニケーション・ファシリテートで、そこでの話を TD に反映できればとは思っているのですが、まだ十分にはまとまっていないので、今後も引き続き議論できればと思います。谷口さんとかからグラレコで何ができるのかももうかがいたいし、TD のこれまでの諸実践のなかでわかった気を付けなければいけないこと——ケーススタディと理論的整理の両方の側面から——を知りたいと思っています。そういうことについて共有できると嬉しいです。

2 Lacey, H. (2004). Is science value free?: Values and scientific understanding. Psychology Press.

Risjord, M. (2014). Philosophy of social science: A contemporary introduction. Routledge.

[インタビュー] 真貝理香さん (2020.8.5, 9.14)

▼超学際的な活動で気にかけるべきもの：残り時間、それぞれの価値観

[太田] 応哲サマースクール（以下、サマस्क）では、ミツバチをテーマにしたご講演をいただき、ありがとうございました。真貝さんとは地球研のFEASTプロジェクトでもご一緒させていただいているのですが、ミツバチのプロジェクトの他にも、京都市の「食と農の未来会議」をはじめ、いくつもの超学際研究を進められています。超学際的な活動で、気にかけるべきものをいろいろおうかがいできればと思うのですが、まずは、真貝さんが超学際研究にご関心を持つようになったきっかけを教えてくださいても良いでしょうか。

[真貝] じつは「超学際研究」という研究のあり方は、地球研に来て初めて知りました。もともと考古学、人類学出身なので「学際的」は知っていましたが…。ステークホルダーとして、学術関係者だけでなく、さまざまな地元の人を含むというプロジェクトの進め方は、環境問題に取り組むうえで必要だと思います。

[太田] 考古学関係だと、そういう研究の仕方はあまりないのでしょうか。

[真貝] 考古学や人類学でも、フィールドとなっている地元の人との交流はありますが、調査の成果を地域に還元するのが主流ですね。「あなたの町からこんな素晴らしいものが出てきました！」という報告会をしたり、記事や一般書を書いて出版したりとか。でも、遺跡の保存運動は、地元の人を巻き込んで何かをすることはあります。研究者だけが「この史跡・遺跡を残してくれ」と言うのではなく、地元の人と一緒に活動をしたりなど。

例えば、私が関わった富永屋の保存活動のケースでは、私は「地元の人」としてかかわっています。富永屋は、京都府向日市にあった西国街道沿いの江戸時代からの旅籠で、地元のボランティアが、カルチャースクール的な活動をしていました。座敷やおくどさん（竈で煮炊きできる台所）は現役でうまく使われてきたのですが、持ち主の方が高齢になり、「管理を続けていくのは厳しい」「市が買い取ってくれるのなら残したい」ということになり、残す方向性を模索しはじめました。じつは、富永屋は、登録文化財にはなっておらず、個人の所有のままだったのです。

結果としては、富永屋の建物は解体されてしまいました。市議員の方々、博物館の担当者の方々との交渉も行き、書類も整え、交付金などをもらうための準備もしていたのですが、時間が足りなかったですね。地元の皆さんは富永屋の解体を本当に残念がってらしたので、もう2,3年早く動き出せていたら…と思います。

[太田] 超学際研究だけでなく、いろいろな立場の方が関わる活動は、本当に時間がかかりますよね。

[真貝] 誰かの一存だけでは動きませんからね。「これは保存すべき価値がある」とするののかも、人それぞれです。行政からすれば、富永屋が指定文化財になりましたとなれば、立派なものなので残しましょう、となるでしょう。普段から富永屋を使っている地元の方からすれば、それは生きた博物館です。江戸時代からの煤のついた梁を見て、そこに触れることができる。おくどさんで料理をして、それをみんなで食べることができる。この体験は他では得ることがほとんどできません。生きた文化財です。市民が良いと思っているところの価値は非常に大きいと思います。

研究者からすれば、富永屋は歴史的にも貴重な史跡です。向町は京都市のはずれに位置し、西国街道を通って京都に来た人が最初に泊まる宿場です。修復が必要ではありますが、向町市の町の成り立ちを考えるうえで、「それを残さないで、何を残すのか？」と言えるほど重要なものです。同志社の先生が3Dカメラで富永屋の内部を

ずっと撮っていらっしやいました。

▼超学際的な活動で気にかけるべきもの：キーパーソン、それぞれのケースの実情

[真貝] 富永屋の事例では、いま振り返ると、向町市長にもっとプレゼンすればよかったかと思います。史的価値や、Change.com と紙媒体で集めた署名だけでなく、おくどさんカフェを開いてみんなが楽しそうにしている様子を資料にまとめてもらって、それをもとにプレゼンすれば、もしかしたらトップダウンでいろいろ動いたかもしれません。

[太田] キーパーソンが動く、それまで議論を重ねてきた活動が、一気に具体的なものとして現実化かるということはよくあります。

[真貝] 誰がキーパーソンなのかを見極めることが大事だと思います。長野のフードポリシー・カOUNシルのように、すでに類似のコンセプトのもとで活動しているグループがあれば、一緒に活動するところから始まると思います。**どの人に提案するか、どこまでは今年中にできるか**という見通しを立てることは、超学際研究を実践と結び付けていくうえで非常に重要だと思います。キーパーソンが「やるんだ！」と腹を決めて、**楽しそうに**やると、周りも動き出す、というのは、超学際研究と実践が結びつく一つのパターンなのではないでしょうか。まずはお試しで関わってもらうとか、御礼を言うことを忘れないとか、そういうプロセスのなかで、**地域の実情を見極める**必要があると思います。

[太田] 地域の実情を知るのは、でも時間をかけないとなかなか進まないんですね…。事例 A での成功が、事例 B で役に立つとは限らない。ケースバイケースでやっていくしかないのです。

[真貝] そうなんですよ。オフィシャルな意見交換のときにみんなの前でいう意見と（「許可できないです」、個別に聞いたときに聞く意見が違う（「私個人としては、1 回くらい試しにやってみてもいいかなとは思っています」）ということもよくあります。両方とも本心ではあるのですが、例えば責任を追及されるような言質をとられたくない、というのは人が誰しも思うことなので。いろいろなタイミングで話を重ねていくには、やはり時間がかかります。

また、コアな参加者の方は、皆さんもうすでに忙しいので、やることを見極める必要があります。プロジェクトには期限があるので、やりたいことを全部はできません。例えば、「食と農の未来会議・京都」は、いまは都市農業にシフトしています。これは、じっさいに調査してみたところ、京都市内の農地が減っていることがわかり、関係者の皆さんの意見も「農地を減らしてはいけない」「農家さんにばかり負担をかけさせてはいけない」「コミュニティ農園は必要だよ」「農地を市民に開きたい」というところである程度一致していることがわかってきました。ただ、この案件を、京都市の行政のどこに持っていけばよいかはまだわかっていません。

▼普段は見えないフードスケープをつないでいくこと

[太田] サマスクで印象に残っていること（思い出すこと）を教えてくださいませんか？

【真貝】 フードスケープという切り口は印象的でした。食についていろいろなテーマや切り口があることが可視化するプロセスが素晴らしかったです。登壇者の方々だけでなく、参加者の方もフードスケープを描いて見せ合うことで、自分の知らなかったテーマ、自分の知らなかった切り口があることがわかり、脳内のチャンネルが開くような感じがしました。

【太田】 私自身も、普段はなかなか見えないフードスケープを見ることができました。真貝さんの花粉媒介者としてのミツバチの役割もそうですが、他にも、Christophさんと小田さんの、地理情報を活用した京都市内の生産緑地の減少や、石川さんのフードテックの話など、日常生活ではなかなか見えないフードスケープを、見る機会を提供できるのが、研究者なのかなと思いました。

【真貝】 そうですね。典型的なものが、フードシステムのなかの流通だと思います。フードスケープとして、農家さんの写真、食べている写真はよく見ますが、どのようにその間で食べ物が運ばれているのかを見る機会はほとんどありません。例えば、日本はフードマイルージが非常に高いのですが、これは家畜飼料を大量に輸入しているためです。国内で生産されている畜産も、食べているのは国外産の穀物。だから、国外のフードシステムが破綻すると、国内も大きな影響を受けることであったり、そもそも草食動物のウシが穀物を食べていることの"不自然さ"など、一つのグラフからいくつもの「ふだんは見えないフードスケープ」をつなぎ合わせるができます。

【太田】 今回のサマスのタイトルは「フードスケープをつなぐ」ですからね！

【真貝】 その「つなぐ」という要素も、重要だと思います。研究者によるエンパワメントについて、1980年代に必要なと考えられていたのは「正しい知識を教えてくれる先生」でした。その役割がなくなったわけではないですが、いまはさらに、「知識の共有が進めるために、どういう順番で何を見せるかを考える、コーディネーター、キュレーター」に近いことをやっているように思います。住友さんがご紹介されていたフードスケープ展の企画はとても印象的でした。

▼ネオニコチノイドと科学技術のリテラシー

【真貝】 サマースクールでお話させていただいたネオニコチノイドなのですが、あれはとても難しいところがあって、ちょっとその話をさせてください。一つは、これはネオニコチノイドに限らないのですが、農薬をどのように考えるかです。高齢化が進んで外国人労働者の方の力なしでは立ち行かない生産地で、例えば農薬を全面的に禁止すると、さらにどれくらいの労力がかかるのかという側面を私たちは無視できないわけですよ。農薬をいま全面禁止にしたら、農業生産力は維持できないですよ。それに仮にも法律で定められた基準内のものを使っているわけだし、目の敵にするのは過剰反応じゃないですか？ という意見は確かに一理あります。

あと、私はネオニコチノイドにかけられている規制の話をするときに結構慎重に話しています。ネオニコチノイド系農薬については、① EUでは、② 3種類が、③ 屋外での使用を、禁止しているんですね。ただ、日本の生態系でどうなるかっていういくつか査読論文が出てきたんだけどまだ評価が未確定であったり、ネオニコチノイド系農薬のすべての薬剤が同じように危険かというとなんか言えなかったりするわけです。あと、生態系への影響についても、昆虫だけじゃなくて鳥類にも影響があるとかないとか、健康への影響に関しては、ネオニコチノイド系農薬は皮だけでなく果肉にも残存する可能性があるとか、この5年間でいろいろ調査結果が出てきたのですが、まだ確定できていない段階です。これらの結果について、心配だというのはわかるのですが、研究

者としては不安を煽るようなことはしたくないので、「こういう条件で、〇〇という危険性を指摘する論文があります」という話し方を心掛けているつもりなのですが、「〇〇は危険！」みたいなまとめられ方をされてしまうことがあるわけです。

【太田】 2番目は非常によく聞くお話ですね。新聞記事とかでまとめられるときに、境界条件の部分が落とされてしまう、というのは。「① EUでは、② 3種類が、③ 屋外での使用を、禁止している」という3つの条件がついているはずが、「ネオニコチノイド系農薬は危険！」というところから聞くと、①、②、③の情報が耳に入っていないことがあります。

【真貝】 間違っているわけではないので、訂正してくれとは言いませんが、もう少しグラデーションのある話したはず…と思うことはあります。ネオニコチノイド系農薬ということで全部一緒くたにして扱うのに対しては、いや、強さとか成分とか、いろいろあるやん、とか。

【太田】 そういうグラデーションや条件がいかに重要か、という科学技術リテラシーは、とても重要です。特にTDにおいては、「この条件では、こういうことが、これくらいの妥当性で言えます」という条件付きの話で議論ができるかできないかは、結論に大きな影響を与えたいと思います。もしTDのトレーニングメニューがあれば、「条件付きの話ができるようにする」というのは基礎メニューですね。

【真貝】 あと、「農薬で死んでいるのはミツバチだけではない」ということも指摘しておきたいです。ミツバチは面白くて可愛い昆虫なんですけどね。可愛くて健気によく働くのに農薬で死んでしまう、かわいそうなミツバチ……、みたいな物語になると、ミツバチだけに目がいってしまうことになりかねないです。あと、「ミツバチは農薬以外の要因でもいなくなる」も強調したいところです。ミツバチがいなくなるのには、複数の原因があります。例えば、ミツバチの気管に寄生するアカリンダニの全国的な拡大や、蜜源植物の減少など。でも、そういう複雑な話は、SNSとかで拡散される過程で落とされる傾向があります。環境教育にミツバチを使うのは、日本でもけっこう広まりつつあるんですけど、そこでもやっぱりミツバチに注目しちゃうんですね。例えば、「一匹のミツバチは、一生のうちでひとさじしかハチミツをとれません。それを私たちはいただいています」という結びにしたりとか……。

私たちが話したいのは、ある出来事には複数の原因がありますし、ありえますよってということなんですよ。単一の植物だけでなく、複数種の蜜源植物を植えましょう」「その地域の植生に合った植栽にしましょう」という話もしたいです。ミツバチだけの話じゃないんです、ということは声を大にして言いたいですね。

▼ミツバチから芋づる式に関係を広げていく

【太田】 ミツバチに最初に注目されたのはマックスさん（※真貝さんと【太田】の共通の同僚の Maximilian Spiegelberg さん）でしたっけ？

【真貝】 そうです。ドイツでは授業でミツバチの大きさを学ぶ機会があるし、養蜂家も多いし、ふつうのスーパーで、ローカルハニーを買うことができる身近なのに、日本では国内産のハチミツが少なくそれほど身近でもない。この違いは何か…？ という話になったんですよ。それで、調べてみると、ミツバチの研究者はたくさんいるけれど、養蜂家のライフワールドはどんなものなのかはあまり知られていない。特に、趣味の養蜂家さんのデータが少ない。

そこで、マックスさんたちとやったのはミツバチと養蜂を通じて地域のあり方を考えるということでした。2018年11月に、京都市中京区で、地域連携セミナーを開催したのですが、基調講演に、前田京子さん。スピーカーに、養蜂をやっている方、市の緑化政策の方、日本野鳥の会の京都支部の方、京都の真ん中で有機農業をやっている方にお越しいただいて、農業を使わないことにどんな意義があるかを都市農業や都市計画の観点から話していただきました。ミツバチというひとつの生物種の保全が目的なのではなく、ミツバチから芋づる式にいわゆる生態系、そして社会のいろいろな側面の結びつきの網が見えるようにすることがここでの目的でした。

あと、第二弾のミツバチカフェ。このテーマは「ミツバチにやさしい街」で、このときもあくまでも、ステークホルダーは地域全体でした。単にハチミツだけの話ではないし、養蜂家さんだけの話でもない。私たちの食べる農作物にも、受粉が関わっているし、ポリネーター（花粉媒介者）という観点から見れば、マルハナバチなどミツバチ以外の昆虫も含むし、都市緑化計画のなかで、通年でどこかに蜜源植物となる花が咲いているのが望ましい。

ここでのポイントは、養蜂しなくても、ミツバチに関わることはできるということです。例えば、ソヨゴという木があるのですが、このソヨゴは山を暗くするので、伐採しても良い雑木だと考えられている。でも、ミツバチにとっては、ソヨゴは良い蜜源です。森林管理に際して、あるいは植栽をするときに、「蜜源植物」という観点があると、違った視点から植生の多様性について考えることができます。

環境を守るのは大事、生物多様性は大事、人為的な気候変動がこれ以上ひどくならないように何とかしないとけない、というのはみんなが知っている。「じゃあどうすれば良いのでしょうか」というときに、生物をシンボルとすることで人を引き付ける可能性には注目しています。例えば、兵庫県のコウノトリ保全は、お米の減農薬栽培、湿地帯の保全、エコツーリズムなどと広く結びついています。これも、コウノトリを基点として芋づる式に考えていくと、結局、広く関わっていくことに気づくという好例だと思います。南ドイツの都市で「ミツバチを守れ」という法令制定のための175万人の署名が集まったことがあります。この法令も、牧草地などは花が咲いてから刈りまじょうなどのミツバチの周辺に関わる事柄も含んでいます。

ミツバチが良いのは、アクターの広がりがあるとともに、都市でも、田舎でもできるからです。TDのプロセスには、それまで関心がなかった方のある種の「巻き込み」が——いい話聞いたね、だけで終わらせずに、行動につなげていくことが——鍵になると思うのですが、ミツバチをシンボルとすると、自分なりの関わり方で、いろいろな地域づくりへの参与の仕方がわかるという効果があると思います。じっさいにセミナー後に、西京で活動をはじめた方もいらっしゃいます。

【太田】 ミツバチから広がるアクターのつながりがわかると、森林や町の見方が変わってきそうですね。生物をシンボルとすることの効果は、人を引き付けることもそうですが、普段の自分の生活を別の生き物の視点を見たりとか、生活と地続きなところで、いろんな仕方で口作りに関わることができることがわかる、というのが望ましいんでしょうね。さっきのソヨゴも、人間の目からすればどうということのない木だけれど。

【真貝】 そうなんです。いままで山を見たら、「あ、緑だな」としか思わなかったんですが、いまは植林しているかどうか分かる。チョウの種類もわかるようになったし、あと、蜜源植物は地味な植物が少なくないのですが、ミツバチの目で町を見られるようになると、そういうのにも気づくようになりました。だから、街を歩くだけで、いまはすごく楽しいです。

もともと私の専門は考古学なのですが、考古学をやる前、栗は栗でした。でも、縄文時代に栗は食用でもあると同時に、腐りにくい材木でもあることを知って、見る目が変わったんですね。線路の枕木、はさがけも栗で作っていることが多い。そしていま、ミツバチをやるようになって、栗が良い蜜源植物でもあることを知って、ますます「栗すげーじゃん！」という感を深めています。そういうことがなければ、栗は栗のままです。

【太田】 関わった人の世界の楽しみ方がちょっと広がるという、そういうタイプのキャパシティ・ビルディングは、TD 研究を政策形成のプロセスと見れば副産物ですが、むしろ生涯学習のプロセスと見れば主要な成果ですね。ただ、そういう「世界の楽しみ方がちょっと広がる」という成果は、非常に測りにくいんですよね……。

▼ TD 研究の難しさ：評価、善意、時間

【真貝】 TD 研究は、時間もかかるし、論文もなかなか書けないし、種をまいてもそれが育つのはいつでかわからない。効果がすぐ出るわけではない。でも、それ以上に難しいのが、研究成果をどのように評価するか、という点だと思います。

【太田】 完全に同意です。政策提言ができた、条例ができた、は素晴らしいことだし、重要かつわかりやすい成果ではあるけれど、「ミツバチの目になる」という成果は、どう評価したら良いかわからない。

TD 研究の評価の難しさは、研究成果の評価を使うのが誰なのかが、一義的に決まらないという問題と関わっているように思えます。研究者が使うのか、研究者以外が使うのか。例えば、論文を書くために使う評価なのか、助成金を継続してもらうために使う評価なのか、地元の人と今後も研究活動を続けることができるかどうかを測るために使う評価なのか、それぞれの評価基準は相当違うはずですからね。

【真貝】 温度差もきっとあるでしょうね。

【太田】 だから TD 研究の評価については、研究者だけじゃなくて何人かの人関わるステークホルダーの人たちで、評価事項を最初から作って、これができたらよしとしよう、という形にするのがベストなのでは、と考えています。自分たちでゴール設定するところから始め、適宜、変更の機会を作るという。その形式の一つが、いま、金セツピョルさんとやっているループリックです。それを作るプロセスで、今回のサマスクでやったようなグラレコはかなり使えるのではないかと思います。

【真貝】 そういえば、これは聞いてみたかったんですが、グラレコ、書く人によってだいぶ違いますよね。まとめ方に、レコーダーの方の世界観が結構出てくる。だから、私たちが話している内容のなかで、切り取ってほしいところとは違うところが切り取られる場合もあるし、発言の強調のされ方も変わってくる。もちろん横から見てフェアに書いてくれているのだとは思いますが。

【太田】 この前、運営者鼎談をやったんですけども【※ 41 頁参照】、そこで、グラレコはできるだけ中立的に俯瞰しようとしている、一つのバイアスのかかった見方として扱う、という話がありました。グラレコはそのグループの“正しい記録”ではないので、「ここ、誤記です」とか、「ここが重要なんです」というのは言ってくれた方がレコーダーは嬉しいという話がありました。グラレコは議事録と違って、リアルタイムで見返すことができるというのが特徴なので、議論がひと段落したら、レコーディングの記録を見ながら、レコーダーを交えて振り返りをするのが一番良い活用方法なのではと思います。

【真貝】 なるほど。レコーディングしたイラストに、レコーダーの名前をクレジットするのはありますね。この

人の観点からのまとめです、というのがわかるように。

話はまた戻りますが、TDの難しさでもう一つあるのが、善意でされている、しかしかえって逆効果をもたらすように思われる活動に対してどうすれば良いのか、という話があります。良かれと思ってやったことが、別の問題を引き起こしてしまう問題。

[太田] その河川の生態系にいない魚種を「自然とのふれあい」をテーマにしたイベントで放流してしまったりとか、典型的ですよ。

[真貝] ミツバチの場合も、「ミツバチは多くなれば良い」というものでもないです。スズメバチを誘引してしまったり、熊を呼び寄せる可能性もあります。ミツバチの目を通して都市のあり方を考え、生態系についてのリテラシーを向上させる、そのきっかけを作ることができればと思っています。

[インタビュー] 鶴田想人さん (2020.7.1)

▼食から環境問題にふれる

【太田】 2019年9月の応哲サマースクール（以下、サマस्क）にご参加いただき、ありがとうございました。鶴田さんは現在、東京大学で科学史・科学哲学の修士課程に在籍されていて、また東京・下北沢の「ダーウィンルーム DARWIN ROOM」でもセミナーや読書会の企画でご活躍されていますが、サマस्कのような超学際的な研究・交流に、いつごろから、どのように関心を持たれたのでしょうか？

【鶴田】 サマस्कは、フードスケープ、フードエシックスなど、食に関する研究会を探しているうちに見つけました。なので、超学際的な研究・交流に関心があったから参加したというよりも、食に関する研究会なので参加したというのが実際のところですね。ただ、食に関する研究は、超学際的なものになるに違いないという予感があり、STS（科学技術社会論）やフードスタディーズ系の本をあれこれ漁り始めていたタイミングだったため、サマスクの分野横断的なコンセプトにも、もちろん興味を惹かれました。

それと、私自身、ずっと大学に在籍していたわけではありません。文芸批評などを読み漁っていた独学の時期が長くありました。そのなかで、研究は大学だけでなく、市民とのあいだで、あるいは市民のなかでも、行われるものであると考えていたので、超学際という考え方にはなじみがありました。

【太田】 なるほど。それが、ダーウィンルームでの鶴田さんのご活動とつながっているのでしょうか。

【鶴田】 つながっていると思います。ダーウィンルームは、登壇者の方が、トークショーのように他の登壇者に向かって話すのではなく、むしろ会場にいる参加者のほうを向いて話すデザインになっている点がとても気に入っています。ダーウィンルームには、大学院の先輩である住田朋久さんの紹介で、2019年5月に初めて参加しました。東京大学駒場キャンパスで、「食の歴史と人類学」をテーマにした研究会を主催していたのがきっかけで、代表の清水隆夫さんにお声かけいただき、いまは読書会や「料理の人類学入門」などの企画に関わらせていただいています。

【太田】 食は、鶴田さんにとって前々から関心のあるテーマだったのでしょうか。いま鶴田さんが研究されているシモーヌ・ヴェイユも、食とつながりがある哲学者だと思うのですが、文芸批評や科学論と、食というテーマの重なりについて教えていただけますか。

【鶴田】 私個人の話になってしまいますが、もともとの関心はフランス現代思想と文芸批評にありました。そのなかで、アメリカやオーストラリアの環境倫理学とは別の形で、フランス現代思想がその先端でエコロジーに関する検討を行っていることに関心を抱きました。例えば、フェリックス・ガタリが『三つのエコロジー』などで展開した議論を先に進めるのであれば、生態学や農業などを学び、関わっていく必要がある。文学や哲学だけでは先に進めないと思ったのが、食について考えるようになった最初だったと思います。

もう一つ、環境問題一般についてもいえることかもしれませんが、例えば、気候変動は、日本に住む多くの人にとっていまだ疎遠なトピックだと思います。自分ごとであるには違いないのですが、それは科学者が生み出すデータにもとづいてそう思っている、というより、そう思わなければならないと思っているのであって、あくまで間接的な知識でしかありません。もっと身近なところから、地球で生じている変化を捉えることが必要なのではと思ってたところで、一番、自分にとって身近な接点と感じたのが「食」でした。気候変動に関心がある人も、

そんなこと考えたことない人も、毎日、食べることはします。「食」を切り口にするので、多くの人に環境問題や社会問題に身近に接する機会を生み出すことができるという点は、環境倫理学や科学技術社会論と「食」とを深く結びつけていると思います。

▼絵を描いて、「フードスケープをつなぐ」ことの効用

【太田】 今回のサマスクは、まさに「フードスケープをつなぐ」というタイトルで、登壇者の皆さまからさまざまな切り口で食と環境問題・社会問題を結び付けていただいたわけですが、同時に、「理想的なフードシステム」を語る多様なナラティブ——遺伝子組み換え作物やグローバルな流通システムの是非など——が行き交った場でもあったと思います。これらの異なるナラティブで「食」が語られる場としてのサマスクで、鶴田さんの印象に残っている体験はありますか？

【鶴田】 じつは学生中心の勉強会だと思っていたので、若手研究者や非営利団体として活動されている市民の方が多く参加されていることに、まずは驚きました。また、いろいろな登壇者の方が講演をされるとのことで、座学中心だと思っていたのですが、実際はカラーペンを持ってフードスケープの絵を描くなど、こちらが主体的にかかわらなければならないイベントであることに、参加してから気が付きました。

【太田】 参加者の皆さんに多くを求めるイベントだったと思います（笑）

【鶴田】 （笑） サマスクで印象的だったのは、いろいろな立場の人が意見交換をするにあたって、「絵（フードスケープ）を描く」¹、「席を立て、お互いに見せ合う」、「似ている絵を描いた人同士で集まる」というステップを挟んだことです。このおかげで、普段はなかなか話さないような方や、論文を読んだことのあるような「畏れ多い」先生方とも気軽に話せる潤滑油となりました。

そのことも含めて、文字以外の媒体を通して交流した体験は貴重でした。分野が違う人とのふつうの意見交換では、それぞれ語句の定義が微妙に違ったり、専門用語や前提となる予備知識を持たなかったりすること、また、テーマについて「よりよく知っている人」と、「知らない人」の違いが明確に出て、「知らない人」は次第に対話に参加しづらくなる状況があると思います。意見を言っても「それは違うよ」で話が終わってしまったりとか…。その点で、絵は、描かれたものからいろいろなものを引き出すことができる、超学際的な交流と非常に相性の良い触媒だと思いました。

【太田】 そう言っていただけると嬉しいです。絵を介した超学際的な意見交換について、もう少し詳しくお願いしても良いでしょうか。

【鶴田】 シンプルに言えば、言葉は、現在あるいは過去についての事柄を、正確に分析するのに長けたツールだと思います。相対的に、絵は、未来について想像するのにより適したツールなのではないでしょうか。多角的な現状分析を集めることと、その先にビジョンを描きうるかということは、別の話だと思います。サマスクのように異なる分野の方々が集まったときに、それぞれの絵を描いて持ち寄ること、「フードスケープをつなぐ」ことを通じて、お互いに現状把握のその先に何を思い描いているのかを知ることができたと思います。

1 講義のあとで、それぞれが学んだことや印象深かったこと、思い浮かんだアイデアやビジョンを、フードスケープとしてまとめ、それを見せ合いながらの意見交換の時間が設けられた。

【太田】 グラフィックレコーディングはいかがでしたか？

【鶴田】 講義内容を一目で振り返ることのできる記録として、良かったと思います。ただ、やはり拙くても「自分で描く」というプロセスが重要だと思いました。講義後にフードスケープを描くとき、単に学習記録を絵として残すのではなく、「どんな風景を思い描くことができましたか？」という、想像力を膨らませる余地がある形で促されたのも良かったです。だから、他の人の描いたフードスケープを見て楽しめたし、発見もあったのだと思います。また、「想像と空想は違う」とはよく言われますが、講義とそのグラレコは、参加者が「想像」を膨らませるための共通の素材、出発点となっていたように思います。最初から、何もなしで持続可能な未来のフードスケープをイメージしてくださいと言われても、単なるばらばらな「空想」になってしまって、対話は難しかったと思います。

▼超学際交流で感じている課題

【太田】 いま、鶴田さんはダーウィンルームでいろいろなセミナーを企画・開催されていますが、そういう、社会におけるある種の文化的・知的インフラの構築やメンテナンスは、超学際的な交流そのものではないにせよ、それを可能にし得る、非常に重要な仕事だと思います。そのなかで、鶴田さんが感じている課題があったら教えてくださいいただけますか？

【鶴田】 ダーウィンルームでは、普段から代表の清水さんとのやりとりを始め、世代も生い立ちも違う様々な方との対話を通じて、イベントが生み出されています。そのなかで、あえて課題をあげるとすれば、イベントの多くが単発のため、知識や議論の深まりがある一定の壁を越えることが難しい、という点でしょうか。

ダーウィンルームの参加者は、イベントにもよりますが、1/3から半分が常連の方で、半分以上は初めての方々です。老若男女のバランスも良く、風通しが良いのが特徴だと思います。そこに毎回のように参加して下さるコアの方々がいらっしゃることによって、セミナーや読書会を通じて、場に蓄積されていく何かがあります。参加者の方と、ダーウィンルームという場がともに育っていったらいいのでしょうか。そうした参加者の方々に向けて、ダーウィンルームも講座を作っている側面があります。

そんななかで、あと一步、概念を整理したい。もう一押しすれば、議論が先に進める。と思うことがあります。しかし、そのためには、ある程度集中して学んだり議論したりする時間が必要で、それが単発のイベントではなかなか難しいように感じています。これまでダーウィンルームでは、カルチャーセンターのように専門家が一方的に教えるというスタイルをとってこなかったのですが、より深い議論をするための壁を越えるには、大学の講義のように一つのテーマについてある程度集中的に学ぶことのできる連続講座や、あるいは難しい古典をじっくり読んで議論するといった読書会中級編なども必要かなと思っています。前者に関しては、最近、「植物の惑星」というシリーズで全5回の連続講座を行っており、多くの方に全回通しでお申し込みいただいています。一品料理ではなく、コースメニューを提供しても、ちゃんと食べてもらえるだけの機が熟してきたと思います。

【太田】 「より深い議論をするためには、壁を越える必要がある」というのは、地球研の超学際プロジェクトでもよく感じるがあります。鶴田さんはホストを務める研究者として、どのようなことに気を使われていますか？

【鶴田】 ダーウィンルームに参加される方々と、今回、サマスクに参加した方々や地球研の超学際研究に参加さ

れる方々のバックグラウンドは、やや違うのではないかと思います。前者は個人として世界に知的な関心を持たれている方が中心で、後者はファーマーズマーケットのように、すでにグループで活動されている方が多いのではないかと。それぞれに対して、研究者が為しうる貢献のあり方は違うように思います。

私が特に関わっているのは前者なので、そこに話をしぼると、例えば読書会では、参加者の方々の発言の「あいだをつなぐ」ことに集中するよう心がけています。私が新しい知識を提供するというよりも、混乱しやすい概念が出てきたときや、一見別々でありながら同じ論点を含む意見が出てきたときに、それらを交通整理し、つなげる役割です。こうした交通整理をすることで、私自身も参加者の方々と一緒に一番学ぶことができるという実感があるからです。最初のうちは、整理するのは失礼かなと思っていたのですが、個々の発言はそのままと点として羅列されてしまいがちなので、それらを線としてつなぎ、場としての論点が浮かび上がってくるようアシストすることに、自分の役割があると今では考えています。

【企画者鼎談】神崎さん、谷口さん、[太田] (2020.9.9)

▼故事来歴をふまえて、新しい事をはじめ

[太田] 神崎さんと谷口さんの対談でテーマになった超学際研究（以下、TD）におけるずれ、グラレコをとる側、とられる側、依頼する側のずれについて、今回の三人の鼎談では深めていければと思います。特に「これまでこういうずれを感じた」という経験談と、「次はこうしてみたい」という見当、そのための鍵となるような文献情報などを出していければと思うのですが、——谷口さん、この鼎談もグラレコとられますか？

[谷口] いえ、今回は録音してありますし、お話に集中したいと思います。

[太田] 了解です。では、さっそく私の経験談から。総合地球環境学研究所（地球研）のFEASTプロジェクトで4年間、超学際的交流のためのいろいろなワークショップやってみてわかったのは、安全な場所を作ることの重要性です。プロジェクト1年目の2016年度に、秋田県の能代市で「30年後の地域における〈理想の食卓〉を描き、その理想像を実現するためにどのようなアクションが必要かを議論する」というワークショップを開催しました。農家の方であったり、秋田銀行の方であったり、地域のNPOの方であったり、消費者団体の方であったり、本当にいろんな方にご参加いただいたのですが、そのときに、立場が異なる人が集まると、共通する規範をお互いに察し合うという現象が起こることがよくわかりました。初対面の方がいるなかで、もちろんそういう察し合いは不可欠なのですが、その場でシンプルな“ゲームのルール”を作ってそれに則って意見を出していただくほうが「私がこれを言うべきなのだろうか…」「ここでの発言が後々、尾を引くのではないか…」と考えるストレスを減らすことができるのではと思いました。議論を可視化するとともに、発言した人でなく、内容に集中するための手法として、グラレコは良い手法だと思っています。

神崎さんが、これまでのご経験のなかで痛感したことは何ですか。

[神崎] 为什么呢ね。地球研の地域環境知プロジェクトが超学際的なプロジェクトにかかわった最初だと思います。ただ、僕はプロジェクト全体のプロセスやアイデアについて、倫理的な観点からの検討という仕方に関わっていたので、フィールドワークのような超学際的な研究の現場にいたというよりも、それを外から見ていたような関わり方でした。なので、多分[太田]さんとは関わり方が違うのかもしれないなと思います。

それをふまえてやっぱり考えるのは、超学際研究は社会問題を扱うし、特定の問題の解決に資するということを言うわけですけど、わりと研究者の側が恐れもなく「研究成果の社会実装」と言うのは、倫理学者としてはすごく怖いんです。最初は「社会実験」って言っていたんですよ。次第に「社会実装」に変わっていったんですけど。

この怖さっていう話は今回のサマースクールの最終日に報告した話です。活動が影響を与える範囲が広いというのは、超学際研究の特徴です。アカデミシャンだけがやることではないし、論文のようなアカデミックな成果物を出すことだけが目的ではないし、アカデミーが上位にいるような状況もないです。そういったところで、やっぱり行っていること、行おうとしていることの影響範囲を考えなきゃいけないというのが一つですね。

もう一つは、調査研究でも「いろんな人を巻き込む」という言い方がなされるわけですよね。これは一つめの話と関連していますけれど、ここにやっぱりある種のジレンマがあるわけです。例えば、環境保全系の超学際研究っていうのは、各地で多様な立場の人たちがそれぞれの課題や関心を持って参加する、それが前提となっているわけですが、一方でその周囲にいる、巻き込むことになってしまう人たちがたくさんいます。その周囲の人たちを巻き込むときに、超学際研究をしているプロジェクトの意図が強くなってしまいうわけですよね。その意図は地域の人たちの関心や取り組んでいる課題からすると外的なものとならざるを得ない。これは非常に難しいなと思います。

【太田】 確かに、『社会調査という迷惑』という本はいまのお話と重なるところが多いです。

とはいえ、実際にやってみると、プロジェクトが事前に想定していたような進み方にはならないことがほとんどですし、その想定外さ、想定からはみ出し方の多様さこそが、個人的には関心があります。リサーチプラン上はこう進みたい、というところは同じであっても、配慮すべき点が違うというか…。例えば、地域Aでは「自分たちがこれから何をすれば良いかもっと示してほしい」と求められたり、一方で、地域Bでは「自分たちのことは自分たちで判断するから、自由にさせてくれ」と求められたり。地域Cでは意見交換のための定期的なワークショップが公民館とかですでに何年も開かれていて、みんな勝手を知っているけれど、別の地域Dではノウハウがほとんどなかったり。

それぞれのサイトの地理的・歴史的なバックグラウンドを考慮して、「巻き込む」にしても自然な形でそれほど関心のない皆さんに入ってきてもらうにはどういう形が良いか、という考え方になったのは、とはいえプロジェクトの5年目にしようやくわかりつつあるところですよ。

【神崎】 そうですね。超学際研究をできるだけ自然にやるとしたら、その地域ですでにどんな活動がなされているか、これまでをちゃんと踏まえた上で、すでになされている活動に加わっていったり、新しい活動をはじめるといった形になるのかなと思います。

【太田】 その、故事来歴をふまえて、新しいことを始める、という点でも、グラレコは良い支援ツールになりうるのではと思います。ビジュアルライズすることで、集まった人たちの来歴を共有しやすくていい。これは谷口さんへのご質問なのですが、いろいろなタイプのワークショップにご参加されてグラレコをされてみて、グラレコが強く触媒作用をもたらしてると感じられる局面って、どういうのがありますか？

【谷口】 これは私の感覚ですけど、人間には考え方の癖みたいなものがあるって、同じ物事を見たとしても解釈が異なるし、どこに注目するのかって人それぞれ違うという前提があります。だから——これは客観性のある程度あきらめることでもあるのですが——、私がいまその場で話されていることを外側から俯瞰的に眺めて、私の解釈や見方でグラレコをして「私にはこう見えました」と提起することで、問題の見え方が変わったということは何回か聞いています。例えば、[太田]さんも参加されていたOpenTSプロジェクトの琵琶湖の水草ワークショップで、「私はグラフィックレコーダーとしてこう見えました」という結構踏み込んだ発言をしていましたよね。

【太田】 よく覚えています。谷口さんがグラレコをふまえて前半の話を俯瞰的にまとめてくださったのをきっかけにして、琵琶湖の自然の話が文化の話に接続されました。

【谷口】 外からまとめる視点が入ることで、問題の解釈や見え方が変わっていくということはあると思います。物事をより複層的・多様的に見える可能性を、参加者の方が感じることができるといえるのか、問題を見る仕方そのものが固定化されている場合に、それを確認して、枠組みを組み替えて、違った枠組みがある可能性を示唆することができるとしたら、それはグラフィックレコードが寄与できることなのではないか、というのを、今仮説として持っています。

グラレコは、ただ描くだけということもあるし、広報に使われることもあります。それ以上に、特にTDに関して言えば、ある問題についてこういう見え方もできますし、こういう見え方もできますよ、という物事の多様性を見せるグラフィックレポートとしての役割が考えられるんじゃないかなと思っています。問題解決のためにグ

ラフィックレコードを導入する場合、ある問題の見方が固定化されていることが、実は隠れた課題でもあると思うので、問題を多面的に解釈する余地をつくることで、違ったアプローチの方法を考えられないかなど。

【神崎】 今おっしゃられたことは非常によくわかります。そもそもある問題が見出されるのは自明ではないし、あるグループの中で問題解決の取り組みがあるとしても、そのグループ全体でひとつの問題が共有されてるわけではない。複数の問題が同時並行的に取り組みられていて、グループ内の一部の人はこっちの問題に関わってるし、別の人たちはこっちの問題に関わっている。そんな状態でも総体的にある大きな問題に取り組んでいる、というのがおそらく、TDの目指しているようなものではないかと思うんですね。一つの問題を固定化して、みんなで解決しましょうという話ではないはずなんですよ。

【谷口】 そのとき難しいのが、人がいろいろな思惑のもとで動くなかでグループをどのように動かすか、ということだと思います。例えば、特定の問題に取り組むワーキンググループを想定するなら神崎さんのいまのお話でOKだと思うのですが。

【神崎】 ここでグループの流動的が重要になります。話をしてるうちに、今までこっちの問題には関わってなかった人たちもここに参加しようとかって、そういう流動性がないと多分問題解決のプロセスが行き詰まってしまうので、いろんな意味で固定的なものっていうのをできるだけないようにするというのが理想ではあるわけですね。とはいえ、それを実際にやるかどうかっていうのはまた別の話ではあると思います。

【太田】 TDという手法が必要とされるのは、問題もその解決状態も集団内に共有されていて、解決のための手段もいくつか候補があり、いくつかのパターンに沿って解くことができる「飼いなされた問題」(tame problem)ではなく、公共政策学で言われる「厄介な問題」(wicked problem)——多くのステークホルダーがいて全員が満足するようなゴールがなく、因果関係が複雑で良かれと思ってやったことが別の問題を生じさせてしまうこともあり、状況の変化が激しくて、問題とその因果関係を定義・特定しようとしている間に状況がどんどん変わってしまう問題——においてです (Brown 2010)。

なので、TDのワークショップで、当初問題だと思っていた事柄、これが唯一の解決策であると思っていた方法が、話してるうちにいや、こういうものの見方もある、この解決策は別のところに歪みを生んでしまうということに気づくプロセスと、それを受け入れるキャパシティ・ビルディングはとても本質的なものだなとお話を伺って思いました。反省や省察は、まさに哲学の領域に属する話ですけども、反省も省察もかなりトレーニングが要る作業だと思うので、それをサポートするツールは必要ですね。神崎さんはゼミとかで、学生さんにそういうトレーニングってされてますか。

【神崎】 いまの大学では、だいたい入学してすぐの時期にクリティカルシンキングとかのメニューを入れてる大学が多いですね。ただ、どれだけ学生の身につけているかっていうのは結構難しく、なぜかという、これをなぜやるのかという意義そのものが学生にはあんまりぴんと来ないようです。方法論ってそんな感じですよ。方法論を先に教えられても、何のためにやっているのかっていうのがわからないと身につかない。実際「厄介な問題」に取り組んでいた人たちで、TDのような取り組み方をする必要があるという実感をもって取り組んでる人たちと、方法を先に知ってそれをやってみる人たちとちょっと捉え方や、必要や意義の実感ってのは違うかもしれない。

【太田】 元からもいろいろ何か取り組んできた中で、自然にこれはもう TD しかないなっていうふうになって、始めるところとそうじゃないところはやっぱりそうですね、違うでしょうね。

方法論をどのタイミングで習得するかは結構難しい問題だなと思っていて、一度コケると方法論の大切さがわかるっていうのはよくある話だと思います。ただ、TD の難点は、なかなか失敗できないというのがあります。この手引きを作る一つの目的でもあるんですが、TD の実際の現場で失敗すると、影響を被る人が多い。そのせいでなかなか経験値が積めないという状況があります。スライムから順番に倒していきたいけれど、いきなりスライムナイトが出てくるみたいな。そのために、TD 的な集まりを通じて、あるいはシリアスボードゲームジャムなどのイベントで、自分の枠を振り返るっていうのは、方法論を理解するきっかけにはなると思います。

今、谷口さんに対面グラレコにご協力いただいているのですが、これは結構意味があるなと思っています。つまり私自身、問題に取り組もうとすると当然ですけども、問題にフォーカスして周りが見えなくなるわけですよね。その見えづらくなった周りを、絵にしてくれるおかげで察知することができるのは、ありがたいと思っています。

▼ TD プロセスのなかの介入をどのように評価するか

【太田】 グラフィックレコーディングはどれぐらいのトレーニングが要るものなんですか？

【谷口】 私はあまりトレーニングせずに始めているのでちょっとわからないです。ファシリテーションの基礎的なところであるとかワークショップのトレーニングをした上でグラフィックレコードに入ったので、グラレコを、場の作り方とか、自然な介入の仕方とかと一連のものとして考えながらやっていました。私のトレーニングは、いわゆるデザイン的な、どこに配置したらわかりやすいのか、どの色彩を使ったらいいのか、何をピックアップしたらいいのかっていう 3 点に絞られています。それよりも、どう観察したらいいのかと、どうやって介入したらいいのか、という、観察と介入について 7、8 年考えて、その中でグラレコが入ってきただけなんです。観察と介入についてのトレーニングに費やした時間のほうがずっと多いです、かつ、実際に必要な部分だと思っています。

【太田】 まさに TD のプロセスに必要なことですね、観察と介入は。

【谷口】 そうですね。あと、【太田】 さんとのオンラインでの対面グラレコ・セッションは、かなり特殊なセッションだと思っていて、ふつうは語られたことを書き留めて、こういう流れで話されていましたねって、フィードバックだけで終わると思うんですけど、話の前後や【太田】 さんがくり返している言葉を含めて心理カウンセリングみたいな仕方でのレコーディングをしています。

【太田】 そういう背景があったんですね（笑）今、私がなんで今このお話伺ったのかというと、TD のエクササイズの中で、「グラフィックを介した意見交換」というスキルがどんなトレーニングで身に着きうるのかなというのが最初の問いとしてあったんです。文章よりもグラフィックの方はいろんな解釈を許してくれるので【鶴田インタビュー参照】、人の話を文章でまとめる局面と、グラフィックでまとめる局面で使い分けられたらなど。でも、それより、観察と介入という側面のトレーニングのほうがより本質的ですね。

【谷口】 グラレコ中、私が緊張すると多分周りが緊張するわけですよね。緊張ってやっぱり伝わるもので、いわゆる神崎さんがおっしゃってた自然の流れをどういうふうにするのか実はすごい意識しています。適度な緊張感

なら良いのですが、妙にかしこまった反応だったりとか、服装だったりとかすると、確実に場に緊張が生じる。なので、ドレスコードは聞くことにしています。

【太田】 とてもよくわかります。ジーパンで行くべきところと、ネクタイ締めて行くべきところはありますからね！ 自然な流れをどうやって、演劇における演出のようなノンバーバルな水準で作っていくのかは地味で、しかし非常に重要な要素だと思います。

【谷口】 じっさい、観察をしながらどういうふうにならに介入するかはファシリテーションの理念ですし、グラレコも話の流れを観察しながらやっています。いつでも俯瞰図をフィードバックできるように、また、この話の流れでいま私がフィードバックという仕方では介入するとどれだけ大きな力になるんだろうかという危険性まで含めて、ですね。相手に対する介入は、暴力的なものにもなりうるのです。

あと、いわゆる研究者の人の話のグラレコをとるときには、使われる言葉を特に観察するようにしています。コアとなる言葉の解釈が違っていると、参加者の受け取り方をミスリードしてしまったり、本当に受け取ってほしいところを受け取ってもらえないような意味のないものになってしまうので。

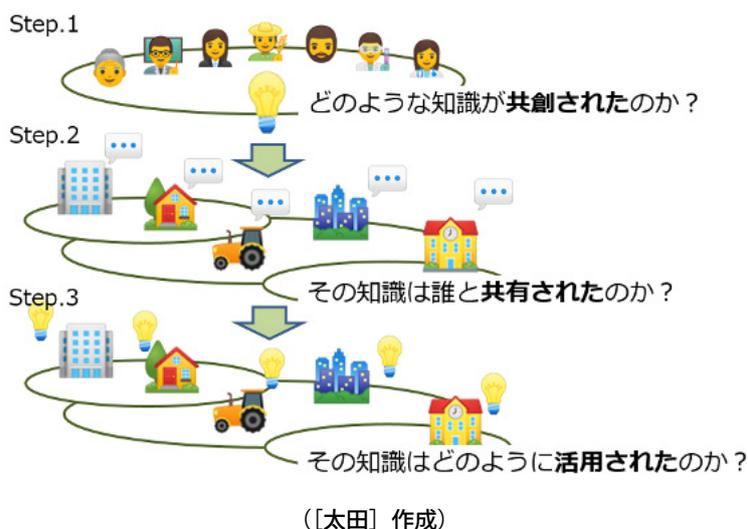
【神崎】 介入のはらむ暴力性って、やっぱり大事な話だと思いますね。ファシリテーターは、場のやりとりからは一本、線を引いたところで、客観性・中立性を持たなきゃいけないんだけど、当然、ファシリテートをするときにはその場に入らなければならないわけで。この二つをどう両立させるのかという話ですよ。

あと、もう一つは、TDにおいて研究者は中立ではいられないわけですよ。ステークホルダーに対して平等に接しなければならないという理念が一方でありながら、しかし研究者も自分自身のスタンスを持たないと場に参加できないというジレンマを、TDに参加する研究者は抱えざるを得ない。

このジレンマは結局のところ理念的には解消できないので、実践上すり合わせていかなきゃいけないわけですが、難しいのは、介入が成功したか、失敗したかという判定基準というのがよくわからない。前に参加していた地域環境知プロジェクトで、TDにおける介入の成功と失敗っていうのどう考えるかって話をしていたときに、保全生物学の先生が「自分たちの分野では、成功／失敗は数値目標として明確に表せる」とおっしゃったのです。要するに、シカの個体数が何匹になったか、などの形で表せると。この数値目標に応じて、プロジェクトが行った介入の成功と失敗がかなり客観的に判断される。

そういう、数値目標を設定できるような問題なら良いのですが、そうではない問題に取り組もうとしたときに、その成功と失敗をどう評価するかはかなり難しい。

【太田】 TDの介入の評価は議論が活発なテーマです。いま関心をもっているのは、ループリックを使った評価です。あと、どのステージで評価するかも重要です。集団内とその周辺での知識の共創・共有・活用は、注目されるべきステージと言えます。



あと、介入の成功／失敗についてのお話は大筋で同意なのですが、一方で、その集団は別に私たちが TD という形で介入しなくても変わっていくよね、という、ごく当たり前の事実をふまえる必要もあるのではないのでしょうか。これは例えば、教育分野におけるカリキュラムの効果の評価の難しさと通底していて、生徒はカリキュラムを離れて勝手に学んでいく側面が絶対にあるので、ここからここまでがこのカリキュラムの効果です、というきれいな形で記述するのが難しい。TD の場合も同じようなことが言えるのかなとは思いますが。

〔神崎〕 あと TD の評価の難しさとしては、研究成果の評価と、社会活動の成果の評価の話が必ずしも連結していない点ですね。悩ましいのは、交流の場とか地域をめちゃくちゃにしても、論文が出るケースってあるわけで。逆に、その地域の人たちの輪に入り込み過ぎちゃって、もうこれ論文として書けないというケースもあるわけですよ。良い論文が書かれているからといって、その TD プロジェクト全体が成功しているとは、単純には言えない。

〔太田〕 研究者が、「私はこの地域でこういうことをして、論文にまとめたい」と表明した時、研究者は、ホストじゃなくてプレイヤーの 1 人になると思うんですよ。これが私の勝利条件だ、というのは他のステークホルダーも当然持っていて、例えば、「家業の後継者を見つけたい」であったり、「新鮮な有機農産物が手軽に買えるようにしたい」であったり、「自分がやっている別の活動のヒントを得たい」であったり、その勝利条件はときに相反したりもすると思うんですけども、研究者もまたそのプレイヤーの 1 人であると。ただ、研究者は「論文を書く」というプレイヤーとしての勝利条件と、TD プロジェクト全体を包括的に見る視点を行ったり来たりしながら事を進めないといけないうし、どっちかに偏りすぎると失敗事例の一つになってしまうでしょうね。このバランスをとるためにも、自分がある問題に集中して取り組み始めたときに、その集中からもれたところをサポートできるようなメソッドが必要で、対話の痕跡が残るグラレコは、そういう意味でもよいと思います。ああ、このときに自分はこういう前提や問題認識で話していたな、というのを振り返ることができるので。

この作業は、ある人にとってはすごい嫌なことかもしれないんですけど。

〔谷口〕 研究者からみた評価、地域からみた評価、その他の評価——は、それぞれ違う、別の評価基軸があるというのは TD の大きな特徴ですよ。しかも、同じ研究者の立場からの評価であっても、例えば「論文数」という基準では失敗だが、「プロジェクト終了後のその地域での継続的な活動」がクリアできていたので成功と言っ

てよい、という場合もあるはずです。このように評価者が複数いることと、評価が複層的であることが、TDの評価を難しくしている要因なのかなど。

グラレコに関していえば、「評価者が複数いることと、評価が複層的であること」が実際どうなっているのかを考えるために、何が話されているのかを可視化して、残し、どのような評価軸がありうるかの検討に繋げていく。途中まで話して、ここからまた話しましょうって形もできます。レコードされた絵はよく実施報告書に掲載されますが、アウトプットの一つではなく、その場のプロセスを手助けするための、中間支援的なツールとして位置づけたときに、この場合、より力を発揮する可能性があるのではないのでしょうか。

【太田】 「評価者が複数いることと、評価が複層的であること」を、理解というか許容するうえで、グラレコはうってつけだと思います。例えば、文章だけだとなかなかピンとこないというか、むしろ感情を逆撫するようなことがあっても、グラフィックをそえることで余白というか、ワンクッションおくことができる。

【谷口】 創造的なプロセスのなかでの評価って何よりもわからなくて、例えば直接的な数値では出ない支援や、あと環境の評価って欠落していたりとかするんですね。このアウトプットは、何に支えられてできたのか。例えば、研究者の場合だと、その地域に先行する実践があったとか、研究費があったとか。そういう評価は、私が聞いたことがないだけかもしれないですけど、少ないように思います。活動を支援してくれたものについての評価が欠落すると、継続が難しくなることもあるのではないのでしょうか。

【太田】 その通りだと思います。TDの諸活動は何に支えられているのか、どのように進展していくのか、という研究はまだデータが揃っていないのではないかなと思います。例えば、イノベーション論の調査であるような、誰がどんな人とどこでよく話しているかというデータをとったり、最初はばらばらだった参加者が、あるイベントや新規参加者を契機に急速にまとまる、という一定のパターンがあるかもしれないです。

▼巻き込んだり、巻き込まれたりするプロセスとしてのTD

【神崎】 さっきの話との関連なんですけれど、僕自身はどちらかというとTDで人を集めすぎるといえるか、設定した課題のためにいろんな人を集めるというやり方にはやや懐疑的です。すでに問題に取り組んでいる人たちに呼ばれる、という、巻き込まれるタイプのTDというのが、対等性を保つ、ある意味で唯一のやり方じゃないかと。巻き込まれた先の具体的な問題に即した形でやっていく、というのが、僕自身にとっては望ましいやり方かなと思っています。

【谷口】 私も神崎さんに同感です。グラフィックレコードであるとかファシリテーションは、創造的な関係を作ったり、人が発言しやすい環境を作るっていう、空間整備や中間支援のポジションなので、巻き込まれた先で、どういうふうに私が接していったらその場の創造性が高まったり、問題の解決に資する効果的な意見がでるようになるのかというのを私個人も考えています。

ただ、巻き込まれる場合の最大の弱点は、みんな切羽詰まっていることが多いことです。気持ちの余裕がないと、アイデアの芽が全部切れやすいついていうデメリットもあります。あくまでも手段の一つとして研究があり、時間をかけて調査したり、情報交換をしていくということが、その問題に取り組むうえで本当に適切な手段なのかっていう検討は大事ではないのでしょうか。グラレコもそうですけど、果たしてグラレコをすることが、本当にその場の環境整備に対して効果的に働いているのかというのはいつも思っています。

【太田】 TD 研究は時間も余裕も必要ですからね。あと、グラレコが常に最適な手法ではないように、クリティカル・シンキングやその他の手法も、問題に取り組む作業に即して、適宜出して入れできるようにするのが理想だとは思いますが。ただ、それにはやっぱり経験が必要なのですよ…。

【神崎】 あと、応用哲学関係の報告書として気になるのは、哲学・倫理学の研究者はいかに TD に参加するか、巻き込まれていくかという点です。これは次の機会でもいいのかなとは思いますが。

【太田】 個人的には、TD のなかで哲学的・倫理的な検討は、時間的余裕があるうちに困りごとを検討して、どんな人の助けを求めればよいか、何について調べたらよいかを記述するところに意義があると思います。この鼎談の最初に戻りますが、これこそが問題でありだからこれをしなければならぬ、と早い段階で固定化してしまうと、他の取り組みの可能性や得られ得る支援を閉ざすことにもなりうるのです。とはいえ、どのタイミングまでそういう一歩下がった検討をするかという話は、また別の機会にできればと思います。

4. アンケート結果と考察

※凡例：括弧内の数字は回答数、アルファベットは回答者を示している。

アンケート項目は以下の通りである。いずれも自由記述で行われた。

0-1. 今回の応哲サマースクールに、どんなことを期待してご参加されましたか？

1-1. 講義のなかで出てきたフードスケープのなかで、もっとも食や社会のあり方を考え直すきっかけになったものは何ですか？ 理由もあわせてお知らせください。

1-2. 講義のなかで出てきたトピックや社会課題のなかで、フードスケープを通して捉えたからこそよく考えるきっかけを得たことは何ですか？ 理由もあわせてお知らせください。

1-3. 講義のなかで、あなたが初めて考えるきっかけを得たトピックや社会課題がありましたらお知らせください。

2-1. 講義後、まずお1人でフードスケープを描いてみることで、考察が進んだこと、得られた新鮮な経験はありましたか？

2-2. 他の参加者の方々とフードスケープをつないでストーリーを作ることを通じて、考察が進んだこと、得られた新鮮な経験はありましたか？

2-3. 他の参加者の方々のなかで特に影響を受けた方のお名前をどうぞ

3-1. 講義、意見交換、昼ご飯や懇親会などのなかで、「厄介な問題」を実感するような瞬間がありましたか？ あったとしたら、それはどんなことでしたか？

3-2. 講義、意見交換、昼ご飯や懇親会などのなかで、あなた自身の食のナラティブ(語り方)の特徴を実感するような瞬間がありましたか？ あったとしたら、それはどんなことでしたか？

4-1. 知識に関わる事柄

各質問項目の回答結果からは以下のような傾向が読み取れた。

0-1. 今回の応哲サマースクールに、どんなことを期待して参加されましたか？

食に関わる関心が多く(13)で、技術哲学、社会変革、哲学的な探求方法に関する関心がそれに続いた。

1-1. 講義のなかで出てきたフードスケープのなかで、もっとも食や社会のあり方を考え直すきっかけになったものは何ですか？

主に、生態学的な関心(花粉媒介者としてのミツバチの役割(3)、土壌の果たす多様な生態系サービス(2))、技術的な関心(培養肉や3Dフードプリンタなどの先端技術(3)、日本酒のグローカリゼーション(2))、社会的な関心(コンテンポラリー・アートで表現される食(2)、日本の食品廃棄の現状(2)、国内外の食習慣の変化(2))の3つに大別された。

1-2. 講義のなかで出てきたトピックや社会課題のなかで、フードスケープを通して捉えたからこそよく考えるきっかけを得たことは何ですか？

ほぼ 1-1 と重なるが、GIS や現地写真などの地理的な情報が考察の契機となったという回答が現れた（都市農地の減少 (2)、ファーマーズマーケットがコミュニティにおいて果たす多角的な役割 (1)、ブータンでの食肉文化の変化 (1))。

1-3. 講義のなかで、あなたが初めて考えるきっかけを得たトピックや社会課題がありましたらお知らせください。

生態学的な関心については、土壌のもたらす生態系サービス (3)、社会的な関心については、アメリカやカナダでのフードポリシー・カウンスル（都市の食料政策を検討する組織）の活動 (2) が、新しく挙げられた。また、意見交換の際にグラフィックレコーディングやフードスケープのスケッチという可視化技法を用いることそのものへの関心もあげられた (3)。

.....

これらのアンケート結果からは、フードスケープが食や社会のあり方を考え直すきっかけを提供する他、フードスケープを介在させることで新たにトピックや社会課題を検討する機会をもたすことが読み取れる。ほとんどの参加者が、新規の知識や情報であるがゆえに生じた関心 [1-3] と、フードスケープを介して生じた関心 [1-1] [1-2] でそれぞれ異なる項目をあげたことは、フードスケープがある程度なじみのあるトピックを再検討したり、そのトピックの隠れた広がりに着目したりする状況において有効であることが推測される。

4-2. フードスケープに関する事柄

2-1. 講義後、まずお 1 人でフードスケープを描いてみることで、考察が進んだこと、得られた新鮮な経験はありましたか？

講義内容を絵にまとめることで学習内容や感想の整理に役立ったとする感想 (8) の他、自分が描くフードスケープがいかに日常生活に根差したものであるかという気づき (3) や、派生する事柄やテーマへの広がり (3) といった効果があげられた。一方で、一つのフードスケープにまとめることによって伝えたい情報が限定されるという意見もあげられた (1)。

2-2. 他の参加者の方々とフードスケープをつないでストーリーを作ることで、考察が進んだこと、得られた新鮮な経験はありましたか？

一見異なる意見を持つと思われる他の参加者との共通する関心の発見 (3) や、同じトピックに関心を持ちながらも異なるフードスケープが描かれうることへの関心 (3)、自身のフードスケープを一連のストーリーを作る過程で様々な視角から検討する機会を得られたこと (3) など、参加者同士の相互学習の効果の促進にフードスケープが寄与したことを示す回答が多く見られた。一方で、自身のフードスケープが一つのストーリーの中に回収されることへの違和感を表明する回答 (1) も見られた。

食に関わる講義の学習内容をフードスケープとして表現するプロセスは、学習内容の整理にとどまらず、①自身の想像力の限定性や、②トピックから派生する事柄への気づきなどに寄与することが明らかとなった [2-1]。この①と②は、他の参加者のフードスケープと自身のそれをつなぐプロセスにおいて、より強く見いだされた [2-2]。

一方で、「フードスケープをつなぐプロセスには無理やり感が否めなかった」[2-2. J] という回答が寄せられたことは、複数の相異なる性質のビジョンの共有において不可分の齟齬をめぐるものであるため、特に注目される¹。①共有のプロセスの記録をつけて議論に可塑性をもたらす、②「このビジョンの共有は、これを指すためにやっています」という枠組みを提示することで“無理やり感”を緩和することが期待される。ただし、②については、参加者がこちらの意図を読んで、忖度して答えてしまう可能性があるため、運営側が“正解”を聞きたいわけではないことを事前に伝える必要があると考えられる。次回に向けた改善点としては、ワークショップのルール（遊んでもらうにあたって守ってほしいこと・遊び方）と、その理由を明示することがあげられる。

4-3. 超学際的交流と「厄介な問題」に関する事柄

3-1. 講義、意見交換、昼ご飯や懇親会などのなかで、「厄介な問題」を実感するような瞬間がありましたか？ あつたとすれば、それはどのような場面でしたか？

講義内容における、市民活動と行政のあいだに現状認識や問題の解決目標のギャップに「厄介な問題」を見出す回答 (3) が見られた。また、意見交換において、すでに特定のトピックについて強固な主義・主張を持つ人との対話に困難を覚えたという回答 (5) が多く見られた。

特に E はその困難について、「それぞれの講演およびディスカッション時に、価値観の多様性というか、互いに相対立する価値観が存在することを多くの参加者が認めている一方で、自らのそれと対立する価値観への目配りが十分ではないように感じられた。また、**対立する価値観の持ち主の話を聞きに行く必要がある or 実際に行きに行っている**、という話をほとんど聞かなかつたように思う」[E] と指摘している。価値観の多様性の認識・尊重と、それが自らの実践にどのような仕方でも反映されているか（どのような仕方でも断念されているか）の省察、そして自分の意見とは対立する意見を持つ人たちのところに話を聞きに行くことの障壁は、超学際研究を特徴づける困難といえる。

3-2. 講義、意見交換、昼ご飯や懇親会などのなかで、あなた自身の食のナラティブ(語り方)の特徴を実感するような瞬間がありましたか？

多くの参加者が、サマースクールを通じて自身の食のナラティブを顧みる機会を得たと回答した (11)。顧慮のきっかけとして、フードスケープを描き、それを他の参加者に説明する体験 (5) が挙げられた。ここで注目すべきは、フードスケープそのもの（絵を描く行為）ではなく、むしろ、フードスケープを説明するときに「特定のトピックについて強固な主義・主張を持つ人との対話の困難さ」[A] を通じて、お互いのナラティブの特徴を発見す

1 他の可能性として、参加者が、このWSに参加したときに「どのようにフードスケープをつなぐのか？」をイメージできなかったことが考えられる。(1) 新しい情報をキャッチする。(2) 自分のこれまでの知識・他の情報とあわせて、一定の理解をする。(3) その理解を画像としてアウトプットする、というプロセスのうち、(1)(2)でつまづいていた可能性がある。それをカバーするためのグラレコであったが、グラレコを参照していなかった可能性も考えられる。この場合、グラレコを参照しながらの議論への誘導をすることでこれを緩和できる可能性がある。

るきっかけとなることが示唆された点である。他の参加者への説明のなかで相手とのナラティブの相違に気づき、「自分がかかなりのテクノフォビアであることに驚いた」[C]、「技術的楽観論の立場ではあるが、同時に保守的な傾向も持っていることに気づいた」[K] ことが複数の参加者によって指摘されている。

また、「narrative の分析は個人の癒しになるかもしれないが、変革へとつながるだろうか？」[D] という疑義も寄せられた。複数の多様なナラティブがあるという分析にとどまるべきではないのは確かであるが、一つの”正しい”ナラティブがあり、そこに力を結集することが求められているわけでもない。ナラティブの分析は実践へのアクセシビリティを向上させるが、それは問題の解決を意味するわけではないということを、ワークショップの前に確認すべきことがここでは反省される。

5. 関係者の所感

a) 主催者から [神崎]

私は倫理学者で普段は文献とか資料の調査が研究のほぼ全てなのですが、近年はこのサマースクールのような超学際的な場や研究プロジェクトに関わるようにもなりました。その際、本来の「ホーム」から離れたところでの活動になるので、勝手の違いや違和を感じるものがしばしばあります。この所感では今回のサマースクールについて、私自身の観点に加えてアンケートの回答も踏まえつつ、振り返ります。それによって、超学際的な研究や実践のあり方について、応用哲学的な観点から検討するためのいくつかの論点を提出できればと考えています。

谷口さんとのグラフィックデザインをめぐるやりとりでは、あえて率直に表明していますが、私はこうした場で窮屈さを感じるものが正直あります。企画運営側が準備した手法やスケジュールが見えすぎてしまうことが、参加者の側に立つとどうしても気になるのです。(今回のサマースクールに関して、私は応用哲学学会のイベントとしてどう運営するかという外枠の部分に関しては企画に関わっていますが、イベントの中身についてはほぼノータッチで、当日は基本的に一参加者として参加しています。)

この問題を緩和するために、こうした場を企画する研究者は、参加者から質問された場合に、次のようなことを説明できるよう準備しておくべきではないかと考えます。まず、その手法を採用するのは何のためか。たとえば、中心に二人の人間が座る場所を作って残りの人はそれを取り囲むように座らなければならない。ファシリテーターからその種の指示がなされる度に、見知らぬ文化の自分には意味不明な儀式に参加させられるかのような困惑を、少なくとも私は感じるのです。そしてそれは私だけではないかもしれない。実体験の話としてしか言えませんが、このような指示に対して自分は参加しないで見ていたいという反応を示す人が出てくるのは珍しくありませんし、ばかばかしいと怒って出ていく人も何度か目にしています。これから参加することになる手法の狙いや有効性について、根拠つきでの説明がなされれば、こうした反応は減るかもしれません。

ただ、そのような説明をするには、こうした取り組みの成果や有効性をちゃんと測定・評価し、その結果を蓄積しておく必要があります。しかしながら、そこまでやっているイベントばかりではなく、その場で終わりというのもなくありません。その場かぎりのイベントを何度か経験した参加者は、この種のイベントへの期待や参加意欲を失ってしまうかもしれません。また、有効性を測る指標をどう設定しておくかについても、課題があります。

次に、やってみて結局なにが達成されたのか、これについても企画者は何らかの説明に参加者に行う責任があるように思われます。ポストイットがたくさん壁に貼られた以外に何が残ったのか。今回で言えばグラフィックレコーディングやフードスケープについて、それを今後どう活かしていくか。時間切れでこのあたりについて参加者に対する十分なフォローのないイベントも多く、改善が必要な点だと考えます。

最後に、超学際的な場や活動を学術研究者が企画運営する場合(今回もそれに該当します)、イベントの成果そのものについてのフォローだけでなく、後にどのような学術的成果につながりうるのかという点についても、参加者にちゃんと説明できなければならないでしょう。超学際的な取り組みは100%純粋な学術研究ではありませんが、研究としての側面も含んでいます。研究についての説明や参加の前提となる同意といった、研究倫理の問題もここに関わってきます。また、このようなイベントから生じた学術的成果は参加者に(少なくとも希望者には)還元すべきという議論もあります。

この冊子は、以上のような問題に対応することを目的の一つとして作成しています。もちろん今回公表する内容はそのための第一歩にすぎず、取り組めていない部分がかなりあります。この所感は、今後の課題を書き残しておくためのものとして読んでいただければ幸いです。

超学際的な研究や実践活動は、応用哲学学会の会員にも関心を持ってもらえるテーマだと思います。自分のテーマに関して超学際的な取り組みを行いたいという人や、超学際的な研究そのものについて応用哲学的に検討したいと

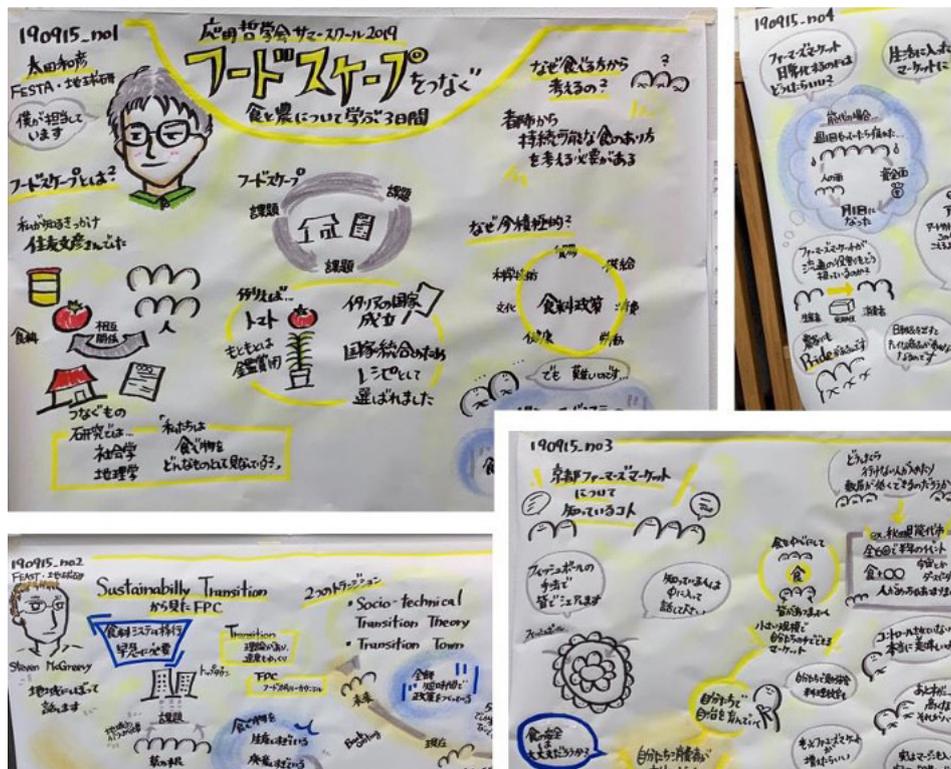
いう人もいるでしょう。この所感で私の印象や個人的経験として述べてきたことは、客観的な根拠や議論で置き換えられなければ、議論として価値はありません。そのような研究は科学技術社会論などの分野で既に行われている部分もありますが、まだまだ十分とはいえません。取り組むべき問題はたくさん残っています。私自身も、開催したサマースクールへの学会でのフォローアップとして、たとえばワークショップなどを今後開いていけばと考えています。

b) レコーダーから [谷口]

▼グラレコ全体 (200)

サマースクール「フードスケープをつなぐ」におけるグラフィックレコーディングの手法が導入され、その所感について、詳述します。

はじめに「グラフィックレコーディング」の言葉について説明します。グラフィックレコーディングとは、発話内容を言葉や絵ならびに図を用いてリアルタイムに可視化し、記録する手法です。この記録をおこなう人を、グラフィックレコーダーと呼んでいます。この手法は、会議、ワークショップ、講演会で用いられます。



[写真①] じっさいのグラレコ

今回のワークショップでは、グラフィックレコーダーとしてワークショップに参画しました。多様な参加者が新しい知識・情報を理解する一助となることを目的に、①グラフィックレコーディングがリアルタイムで参加者が

情報共有できるよう空間環境の提案および、グラフィックレコーディングが事前に入ることお知らせする情報共有の提案、②複数の学術分野の講師によるセミナーの記録、③講師への質疑応答の記録をおこないました。

知識・情報を理解する一助となるためには、主催者のほか、運営スタッフ、登壇者、参加者の四者に対し、事前にグラフィックレコードを導入する情報を共有することが重要です。なぜならば、日本でも企業や研究機関、民間、行政などで会議、ワークショップ、講演会にしばしば用いられていますが、参加者により経験値や活用方法、グラフィックレコーディングの導入目的もまちまちです。そのため、事前に四者に対しグラフィックレコーディングの目的の共有、および活用の方法がイメージできるよう、事前に「補助線づくり」が不可欠です。

「導線づくり」でおこなったことは、開催前 10 日前におこなった主催者との「Zoom を活用した遠隔での 30 分の事前打ち合わせ」です。主催者とレコーダーの関係・連携の話はそれまでほとんど語られていません。当日、参加者への「補助線づくり」の準備としても、重要です。なぜならば、超学際研究におけるグラレコの質を左右するだけではなく、グラフィックレコーダーはワークショップにおいて主催者と一緒に環境整備を役割として担うからです。

ここでの「補助線づくり」とは、①四者間の導入目的の共有、②ワークショップ内でのグラフィックレコーディングの活用方法、③会場内での空間づくりです。今回のケースでは、ワークショップの主催者と事前に打ち合わせでは、目的・活用方法を共有し、参加者を含めた四者にリアルタイムで確認ができるよう、殊に椅子や机の並びから、四者に対しわかりやすい模造紙の配置を提案とともに、複数枚ならべて貼るなど、をおこないました。

当日は、グラフィックレコーディングの効果を活かすことのできるよう、提案通り、水性ペンを用い、壁に複数枚の模造紙を並べて貼り、そこに描く形式で、リアルタイムでセミナーを記録しました。なお水性ペン使用の判断理由は、インクの壁写りを防ぐためです。ワークショップは 3 日間開催されたが、3 日間のグラフィックレコードの模造紙が見えるように環境を提案しました。リアルタイムでグラフィックレコードをおこなう方法はいくつもあります。iPad をスクリーンに映し、アプリを活用し行う方法、紙やノートでかく行う方法がある。複数の講演があるため多くの情報が見えること、またスクリーンやプロジェクターの数等の道具の制限のため、この形式を選択しました。



〔写真②〕 上記のような会場の配置で行われた

研究機関におけるグラフィックレコーディングは、特に登壇者が使用する言葉と意味に気をつける必要があります

ます。分野によっても差異がありますが、類似語であっても、意味解釈が異なる場合があるためです。特に、このワークショップでは、複数の学術分野および実践者を講師でした。グラフィックレコーディングをおこなうにあたり、特に学術的な講演会では、領域や分野により、同じ言葉でも意味づけに差異がある可能性を、殊に念頭においています。

今回のワークショップでは登壇者のセミナーののちにフードスケープをイメージし、えがき、複数人と共有し、議論を深める構成でした。そのため発話者の発言の記録だけではなく、①イメージの想起、②セミナーの理解を促す、この二点において、聴衆にとって補助線になるよう、言葉使いや絵を注意してかきました。フードスケープをかく際に、知識の獲得からアイデア創出に繋げることに意識していたためです。今回、講師によるセミナーののちに、質疑応答の時間が設けられていた。セミナーだけではなく、質疑応答の内容を書き留めることも重要だと考えています。①講演内容の理解、②研究への問いを深める一助となる可能性があるからだ。なお、模造紙は事前打ち合わせ時の提案により、3日の間、会場に貼ったままでした。なぜならば、一目で、今回の目的と議論内容がわかること、また3日の連続ワークショップだったため、3日分の議論が部屋に蓄積されていくことが重要だったからです。例えば、前日の別の登壇者の話が別の登壇者の話につながっているケースも考えられ、過去の議論内容の可視化と蓄積がとともに、議論の行き来ができるためです。なお、意見交換や休憩時に見返す人は徐々に増え、参加者からレコーダーに対し、話しかけられること実際に増えました。

超学際研究において、グラフィックレコーディングを導入されているケースが増えてきました。なぜならば、「補助線」として活用できるのではないかという研究者が複数名いるからです。「日本でも企業や研究機関、民間、行政などで会議、ワークショップ、講演会にしばしば用いられているが、参加者により経験値や活用方法、目的もまちまちである」と前述したが、「参加者により経験値や活用方法、目的もまちまちである」というハードルを飛び越える、または埋める、揃える補助線となりうるのではないかという仮説を持っているからではないでしょうか。

今回のサマースクールでのグラフィックレコーディングの活用事例では、登壇者の講演でのレコーディングでした。制限時間が決まっており、またテーマが明確で、講演内容をかくというご依頼です。今回、複数名での対話でのグラフィックレコーディングの活用でなかったために、対話が混線しているのかなど、それほどグラフィックレコーダーとして対話の分析を必要とする事例ではありませんでした。

しかしながら、研究としても活用される場であったため、登壇者がおこなった言葉の選択における意図の解釈、また意味の解釈、及び前の講演内容との関連も念頭に置く必要がある事例ではないかと考えています。その点において、グラフィックレコーダーにとって、意図や意味を登壇者のお話から観察・分析し、参加者にとり分かりやすく編集をする必要があります。観察・分析した上で参加者にとり分かりやすく編集をすることが、今回サマースクールにおいて「補助線となりえるか否か」ということを問われたのではないかと分析しています。

6. 超学際的なワークショップのための12のヒント

[開催者としての手引き：スケジュール]

▼ スムーズにはいかないことを前提としたプランニングを

どれくらいの学習の伸びしろを期待するか？ 伸びしろに期待しなければならないが、その期待が常に実現できるわけではない。——そのことを、引き受ける必要がある。

▼ 目的を緩く設定しておく

目的の実現のみを目指す、「スムーズにいかない」ことがストレスになるし、かといって純粋な場づくりを目指す、「ここに時間をかける意義はあるのか？」という話になる。楽しいだけを目的にするとつらい、続かない。

[開催者としての手引き：ワークショップ当日]

▼ 議論がしやすい環境に関する配慮を

「前提がもしかしたら違うのでは」「あ、そうですね、ちょっと戻りましょうか」と、気軽に言えるようにする。

▼ 前提を省みることが許す雰囲気をつくる（特に、哲学系研究者は）

「前提を省みる」ことによって良いことがあるかわからないが、いちおう聞いておくか…という雰囲気にしておく。哲学系は、「何にもわかってないなこいつ」とか思われる可能性がある。

▼ タイムテーブルには余白をいれましょう

休憩時間や、終わったあとで話せるような場を作りましょう。

▼ 休憩できるスポットを作りましょう

お茶・お菓子スポット、重要。いくつか種類があると嬉しい（お茶、甘い飲み物、カフェインの有無）。情報収集の場（例：真貝さんのハチミツ、郷土のものとかも）。地球研の場合は、エントランスのソファとか。

[参加者としての手引き]

▼ スムーズに議論が進むことは期待しない。

自分の前提を否定されても怒らない。相手はべつにこちらを非難しているわけではない。ものの見方がちがうのは前提。

▼ 自分が使っていることばの意味合い・ニュアンスが違うことを前提にして話す。

ホワイトボードとかがあったら、適宜書きながら話す。聞き返す。「この理解で良いですか？」「この解釈で良いですか？」、確認しながら話をする。

▼ **場と相手に貢献するために、自分の知っていることを話す。**

自分のストロングポイント。相手の意見や価値観を尊重することは、相手の分野で話をするとは、違う。相手の意見や価値観を引き取りつつ、自分のフィールドで話すことは可能。

▼ **緊張することは当然。初対面ならなおさら。**

[全体の手引き]

▼ **この場に関連する情報共有はきっちりと。相手に伝わっているかどうか確認して進める。**

ワークショップの概要、ワークショップの時間など。

▼ **場が終わった後で、フォローアップ**

ただし、名刺交換を目的にしない。ふつうにお茶とお菓子でお話しましょう

哲学・倫理学の研究者のための超学際研究の手引き
応用哲学会サマースクール 2019 実施報告

[報告書版]

[編著] 太田和彦 神崎宣次 谷口彩

発行日 2021年2月10日

発行所 象灯舎

連絡先：太田和彦 (otakazu@chikyu.ac.jp)

※本報告書は、南山大学2020年度個人研究費（神崎宣次）によって制作された。